

第二章 稲作と鉄器の時代

第一節 安満のムラ

稲作文化 弥生文化の特色は水稻の栽培と金属器なかでも鉄器の使用を開始したことである。この二つの流入はいずれも日本列島に外部から伝来し、しかも後の日本文化の発展で最も重要な役割を演じた。しかしながら、イネがどこに発生し、どのような経路を経て、誰によってもたらされたのかということは、さまざまな説明はあっても、いまだに定説のないのが現状である。また鉄の問題も同様であって、その答えをはっきり出す段階にいたっていない。これらの問題を解く重要な手がかりは朝鮮半島や中国大陸にあると推定できても、それらの地域の調査結果が明らかでない現在では、伝播の概略を想定するにすぎない。

日本に縄文文化の段階にイネの栽培はなかったものであろうか、という疑問は誰でも抱く。そこからさまざまな憶測や推測がなされてきた。事実、西北九州の縄文晩期の土器にイネの籾の圧痕があることや、それがさらに縄文後期にまで遡ることさえ主張されている。またイネでなくとも、イモなどの栽培が縄文中期にあったという考案も公表されている。こうしてみると、日本における稲の栽培は縄文時代にあらわれていたか

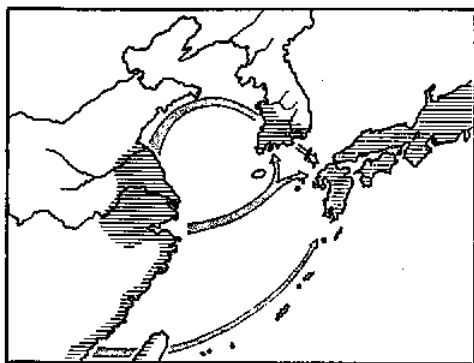


図63 イネの伝来経路想定図

もしれないという予測を人々にもたらすだろう。

たしかに、イネの栽培がはたしてどこで出現したのか、またそれに先行するある種の植物栽培がどこでおこなわれていたのかという問題は、これから述べる稲作文化の問題にとって重要な問題であり、無関心ではおれない。けれども、文化を構成する主要な軸がどういうように発展的組成をもつかということをみなければ、単なる事物起源論や来歴の説明に墮してしまいうおそれがある。

弥生文化を稲作文化という裏には鉄の文化という意味がこめられているのであるから、鉄所有の社会の性格をみることから出発することになる。つまり鉄を駆使できる社会としての、イネの文化であったといってもよいだろう。これから述べる弥生時代とは

そういう前提をもった社会であった。そうしてみると、この文化が外方からの新来の文化であったというさきの前提は、この文化の根源の世界にわれわれの視点をおよぼさないわけにはいかにないように思う。

イネと鉄が結びついた社会はどこにあったのであろうか。イネの痕跡が中国新石器時代の仰韶文化にみられるとか、その後の黒陶文化のなかにあるということはイネの栽培の起源論としては重要であるが、いまの主題からははずれる。しかしここで注意しておきたいことは、イネの栽培が鉄文化の段階には中国では広汎な地域に拡大していたらしいということである。それでは鉄はいつから登場するかというと、現在のところ

紀元前一四世紀前後商時代には隕鉄の利用が認められ、春秋晩期すなわち前六世紀末ごろにはやや低い温度（摂氏八〇〇～一〇〇〇度）で、木炭を使って鉄鉱石を還元する方法が知られていた。しかし、三世紀後半の段階にいたっても、戦国時代北方の六国では「なお青銅の兵器を使用し、鉄をもつて兵器を製造するのは技術的にまだ困難であった」といわれている〔中国科学院考古研究所編著、杉本つとむ訳「中国の考古学」〕。中国における鉄器生産は前漢武帝期に急激な発展がみられ、「以後、国家の壟断するところとなって、鉄器の伝播はさらに迅速になった」とするなら、わが弥生時代の鉄器の出現もまた、そうした動向の中において考えるべきであろう。朝鮮の北辺に戦国時代北方の雄燕国の文化が波及し、鑄鉄製の農具等に、明刀銭を共伴していたことは、よく指摘されることである。しかし、その後の状況になると明確さを欠き、前二世紀末の漢植民地「楽浪郡」以下四郡の設置に重要な歴史的画期を求めざるを得ない。とすれば、さきの設問の解は、前二世紀末の段階に一つの答えを設け、それ以前にどれほど遡りうるかは、今後の朝鮮半島の資料の出現いかんにかかっていると云わねばならない。

およそ弥生文化のはじまりの年代については、前二〇〇年頃とか、前三〇〇年頃とか推定され、研究者の間でも一致をみていない。年代の問題は後で述べるとして、ここでは弥生文化のはじまりの年代をほぼ前二〇〇年頃とみて、前期の継続年代を一五〇年間ぐらいとおこうと思う。

安満 B 北九州にあらわれた弥生初期の文化が、瀬戸内東端に達したことを正当に評価したのは小林類土器 行雄氏であった。この特筆すべきことは今から四〇数年前、高槻の安満遺跡出土の土器によって明示されたのであった。それよりさき一九二八（昭和三）年五月、京都大学農学部付属「摂津農場」

が設置される際、弥生土器や石器が出土した。通報によって同大学文学部史学科考古学教室の島田貞彦氏は同月一九日現地を訪れ、出土遺物および包含状態を確め、六月二日史学科学生有志の援助のもと、小発掘を行い資料を採集した。その後同月九日にも大甕出土の報告により調査したという。このときの調査の所見は翌一九二九（昭和四）年七月の『人類学雑誌』に「摂津国高槻摂津農場石器時代遺跡調査報告」として、前記島田貞彦氏のほか、水野清一・小川五郎・三宅宗悦氏ら四氏の連名で発表された。この調査は三島地方における最初の弥生遺跡の調査であった。

当時発掘された部分が現在のどの地点にあたるのか明瞭でないが、同報告の記述や写真によって判断すると、ほぼ現在の農場事務所付近らしい。農場の灌漑用の溝で窺われたところでは、耕土下に七～八寸の黒土層があり、土器は概ねこの層中に包含され、その下の河原石の礫層にも往々土器が存在するが、その下には遺物の包含はない。礫層は断続しているが「東部に於ける或溝は七～八尺の深さにて土器を多量に含み、黝褐色の土砂の層からなっていたのは如何なる理由に基くか今直ちに判定し難い。これと同様な状態は農場の西北端に於いても遭遇した」とある。いまにしておもえば、この七～八尺の深さの遺構は、後年事務所北側で確認した集落をとりまく二本の大溝に関連するものかもしれない。当時は徹底的に遺構を追求するといった研究段階にはなかったし、弥生土器の編年体系もまだ着手されていなかったから、遺構より遺物の類別に大きな関心がはらわれた。「包含された土器は悉く弥生式系統であつて何等の層位的・部分的の相異を見ない」状態であつたし、石器類については「著しい変種を見ることなくむしろ形式変異の少」ないものと認められたので「遺跡が比較的短い時期を代表するものではないか」という判断を示した。この判断の前提

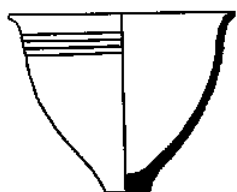


図64 安満B類土器 (1/6)

には「弥生式石器時代」という語にみられるように弥生土器が石器時代に行われた段階と、石器時代後に行われた段階とが、しかも「弥生式土器の時代が全体から云って比較的短いかも知れぬ」という想定があった。この想定は、A・B・Cの三類に類別した土器について「併用された時期と云ふものを想定」させる結果になったが、土器の分類で器形が土質焼成と相関関係にあり、「単に土質とか焼成とかによって土器の製作が規定された」と考ふる以外に、器形即ちその用途によって土質とか焼成とかが却って規定されると考ふることもまた同様に必要である。そして「その器物の製作にあたる社会人の意志と云ふものが考量されるべきである」とした点で注目される。

ここでB類として類別された土器は深鉢形土器を主とするものであった。小林行雄氏は「安満B類土器文様の特徴は櫛歯状器具によらざる沈直線文、櫛目文様ならぬ平行直線文にある」と明確化するとともに、それは深鉢形土器以外の他の形態にも見受けられる特徴であるとし、このB類土器が北九州にまでたどりうることを例証した。当時北九州の弥生式土器については、中山平次郎氏が同地方に普遍的な第一系土器と有文土器の多い第二系土器とを区別して扱おうとしていた。それまで弥生式土器の櫛目式文様について研究していた小林氏は、中山氏の第一系と第二系の区別と対応させて、「安満B類土器も亦その様式確立の為に区別せらるべき他の弥生式土器をもつ」と指摘した。この指摘は中山氏の土器系統観とは異なった歴史的観点に立っていたことを示すものであった。氏が後年「また中山の二系統論を批判するにいたらなかった」と述べたこととは別に、「安満B類土器が北九州第二系土器に対して

有する關聯が同一性の段階にまで高められる事は」この時点ではっきりと指摘されたのであった。そこには次のように記してある。「北九州第二系土器を特徴づける文様は同時に安満B類土器に於いても主要なる役割を為すものであることが知られる。もはや安満B類土器と第二系弥生式土器との間には両者を隔てる何等の海峡も存在しないであろう。弥生式土器文化が関門地方——北九州に第一歩を印した様に、第二系土器は安満B類土器の最初の足跡であろう事は恐らく正しいであろう」と〔小林行雄「安満B類土器」(『考古学』三一四)〕。

畿内弥生 縄文土器の編年は遺跡の層位を重視したのに対し、弥生土器の編年は單純遺跡の資料を基礎時代の区分とした。一九三九(昭和一四)年の『弥生式土器聚成図録』の刊行は、西日本から北関東までの地域にわたって、五様式ないし三様式の設定を試み、一九四三(昭和一八)年の奈良県唐古遺跡（かど）の研究報告はその後の弥生時代研究の画期となった。そこに示された土器による五つの様式は、前期Ⅱ第一様式、中期Ⅱ第二・第三・第四様式、後期Ⅱ第五様式の区分であった。その後、各様式の細分案が提示され、弥生文化の動態はますます微細に跡づけられようとしている。しかし他面において、社会構造論的な遺跡の探究は多くの問題を未解決のままにとどめているのが現状である。

安満の古 ム ラ 安満遺跡の規模は東西一・二キロメートル、南北三〇〇メートルといわれているけれども、それはごく小さく見積った場合であって、もし水田や水路・墓地などさまざまな遺構を多様に含むなら、もっと拡大することは必定である。そもそも弥生初期の集落がどのようにして成り立っているのかということは現在不明なのであって、遺跡と呼ばれているのは、住居跡や遺物の散乱している局部的微証によっているにすぎない。安満遺跡でも西方の跨線橋一帯では、土器は見当らなくても花粉分析によって

彼等が見つけた最初の場所が、以後永住の地であった場合もあれば、再び移動して二度と舞戻ってこなかった場合もあった。前者の場合は安満遺跡のように、後になって一層集落の規模が大きくなり、周辺にも集落を分出するようになる。安満に住みはじめた最初の場所は、成合から山峡を抜けた松尾川が、淀川の低い流れにむかって流下するその縁辺であった。なぜ彼等がそうした地点を選んだのであろうか。

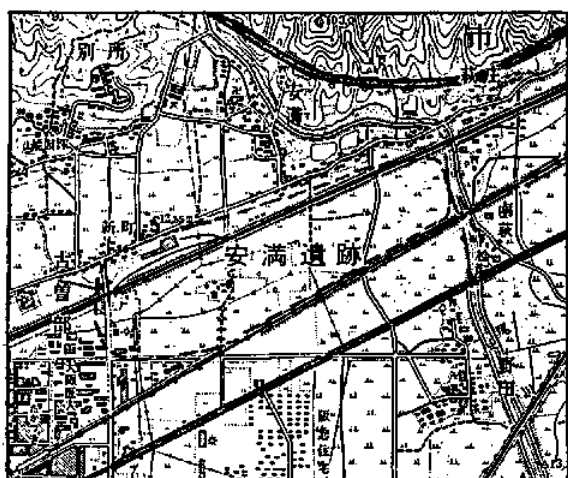


図65 安満遺跡(中央部点線のなか)

イネ栽培の痕跡を検出できているし、そこにかつて水田のあったことが推定できる。同じように京大農場以南にも遺跡の範囲が及んでいるかもしれないという懸念があるのであって、農耕社会初期のムラの様態は、これから述べる部分についてのみ限定されるものではないことを、予め断っておこうと思う。
〔大阪府教育委員会「安満跡」
 生達跡調査概報〕I・II
 瀬戸内を西方から東進した溜々たる農耕文化の流れは、海のようにひろい湿原の中を漫然と進んだのではなかった。集団の移動につきまとう不安は、自ら経営する厳しい条件の選択をせまう不安は、当時の人びとが決して多数でなかったことは、安満にもっとも早くあらわれた古い型式の土器が極く少量であることから推定できる。

母集団か 彼等の移住は決して偶発的なものとしておこったわけではなかった。広大な東アジア鉄器文化圏の政治的変動の一環としてひきおこされたものであった。この地にいたるまでには共に生存してきた母なる集団があつたに違いない。

当時、激しく流れを変える淀川と大和川とは、河内潟の埋立に余念がなかった。いずれは低平な沃野となるはずの干潟には、魚群と水鳥のすだく水沼がひろがっていたであらう。そうした場所を逸早く占居する者もあれば、さらに有利な条件を求めて、安瀾のように中小河川の扇状地に居を求めるものもあつた。しかし、それらに共通してみられる条件は、禾本科植物のイネを養うに足る地貌であつた。弥生時代の古いムラは相互に密なる連鎖の上に出現したのであつた。

集団の移動が、どのようにして決められ、誰によって推進されたかは判らない。しかし少なくとも、複数の人間の移動にはそれなりの規制が働くであらうから、少数であっても、人々の意志を結合する人物として、集団の長は移動の初めから行動の体现者として存在したに違いない。それはまた、新しい天地に一個の母集団を生む創生の世界でもあつた。

当時の人々は同じ生活習慣をもち、言語をもっていたと想定できよう。そして同じ生活習慣をもった後来の移住者もあつたであらう。しかし、それぞれの住む土地の条件は、やがて彼等の家族制度や親族制度にも少なからぬ影響を与えたであらう。開墾する水田の造作は共同で行わねばならないし、溢れる水の管理も協同しておこなつた。また収穫したイネの管理や舟の運行など、一つとして小家族のみでは達成できない問題が横たわっていた。のちの時代にあらわれる地域的な個性はすでにこの段階から形づくられはじめたのであ

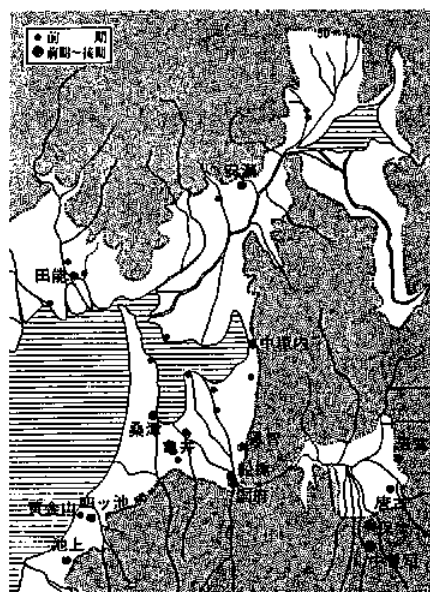


図66 大阪湾周辺の前期のムラ

る。

大阪湾周辺の 図によって、大阪湾周辺に点在する前期の遺跡の分布をみてみよう。当時上町台地より東前期の集落には河内潟と呼ばれる浅い陸水域がひろがり、北からは淀川が、南からは大和川が土砂を

どんどん押し流していた。この浅い潟には、葦原がひろがり魚や水鳥が群棲していた。瀬戸内を東進してきた人々は、大阪湾から河内潟へ進入し、その縁辺に住みはじめた。また他のグループは大和川の流れを遡り、遠く奈良盆地の唐古遺跡その他にも住みついた。唐古遺跡は盆地の中央に河川が集まるところで、東・西・南・北の分岐点に立地している。大阪府の船橋遺跡もそうした立地条件を備えている。両者はそれぞれの後背地をつなぐ意味において、互いに門戸

の役割をもち、それぞれ関与する集落の中核的役割を担っていたとみられる。両者が相互に有機的に関連することによって、大和・河内の諸集団の紐帯が形成されていくのである。

河内潟縁辺の諸集落も、中小河川の出口に立地するという点では他の諸遺跡と大差ない。しかし、淀川と大和川の堆積状況は質的に異なっていたらしい。二つの川の三角洲に

おける遺跡の分布を対比してみると、大和川の方がはるかに多い。この差異は淀川の方が水量の多いことからみて、河川堆積による地形の変化が大和川のそれより激しかったことによるのであろうか。大和川が流域面積において淀川に劣り、その水量が少ないとはいえ、瞬時におこる洪水の激しさは大きな恐怖をさそったに違いない。だからその危険性とひきかえに、水田の拡大や、物質交換に有利な点がなかったら、集落は形成されなかったかもしれない。大和川の三角洲は淀川のそれと異なつて、稲作農耕民がとりつき易い条件をいろいろ備えていたのであろう。

大和川の三角洲はまさに稲作農耕社会の曙光期に、後の母体となるものを用意してくれた地域であつた。各集落がおかれた自然環境の差は、河内潟に関与する諸集落の分業を促進した。潟に臨む集落は、泥土と魚鳥に恵まれていても、木器や石器の素材に乏しかったであらう。しかし外海に近接する舟行の優位性は、それらの集落にのみ与えられていた。こうして、人々が定着しはじめた当初の段階から、弥生時代の諸集落は極めて特異性をもった「場」——例えば葦原と泥土のひろがるムラ、サヌカイト採取に有利なムラ、木材の入手に優位なムラ——として成立した。そして互いに交易によつて依存しつつ、自らその政治的連帯を強化する方向をとつたのである。その最もよい結合を示すのが大和川水系の諸集落であつた。

連帯が強化され、一定の婚姻関係を通じて広範な地域での同族的結合が河内潟周辺に成立しはじめたとき、河内の外辺にもいくつかのブロックがあつた。和泉沿岸の諸集落、猪名川流域の諸集落、淀川上流域の諸集落がそれである。これらの小ブロックは地理的条件において特殊性を有し、必ずしも等質的ではなかつた。しかしそれぞれは河内の諸集落と連繫を保ちつつ自己の特性を発揮していった地域であつた。

ムラの景観

弥生前期のムラは成立の当初から、異なった条件のもとに複雑な歴史的歩みを踏み出していた。淀川北岸の安満のムラもまた独特な性格を形成していく。初めて人々が住みついたのは、山合いを流下した小河川がいよいよ平野にあふれ出し、ゆるやかな扇状地を形成したところであった。調査したところによると、前期のムラは大きな溝にとりまかれていたらしい。らしいといったのは、その溝の内側が未調査であって、住居の調査がなされていないからである。しかし部分的な探索の結果は、溝の内側に広い平地があつて、住居の柱穴と推定されるものもあるから、いずれ群在する住居群を明らかにすることができらるだろう。

住居群の周りに溝をめぐるしているのは安満のムラだけではない。和泉市の池上遺跡にもみられるし、最古の例は福岡市の板付遺跡にある〔岡崎敬・森貞次郎「板付遺跡」
「日本農耕文化の生成」】。板付遺跡は北九州に弥生文化が成立した最初の時期に属する遺跡であるが、ここでは比高二一三メートルの微高地上に、長径約一一〇メートル、短径約九〇メートルの長楕円形に溝を掘りめぐらしている。このことは溝をめぐることが弥生文化の最初期からあった一つの形態だということになる。すべての集落がこの形をとっていたとは言いが切れないが、そうした事例が北九州や畿内・関東地方でも検出され、弥生時代の後期にも継続していることは、この形態がムラのつくり方としてはかなり一般的なものだったと考えられる。

安満の溝は調査時東西一二〇メートル内外、南北もまたほぼ同じくらいの長さで推定された。前述のように、農場建設時にみられた深い溝もそういう溝の一部とみてもよいだろう。溝は二本あって、ほぼ平行に走っている。二本とも同時に設けられたものか、時間的に前後するものか明らかでないが、後者が妥当かもし



図67 安満のムラの景観 (想像図)

れない。どうしてムラの外周に溝をめぐらしたのだろう。そのことは溝の埋り方やその縁辺をみるとある程度、溝が掘られた意味がわかる。

安満では溝の外側に水流があつて、その氾濫のため溝は部分的に外側から埋没していた。また溝の内側には肩に接して柱穴や土壇があつた。この状況は、本来溝の内側には堤のような構造物はなかったということを示唆する。事実、福岡県の比恵遺跡では溝の内側に近接して堅穴住居があり、その排水溝が溝につながっていたから、いまの解釈は例証があることになる。一方、溝の外側には、掘り穴のようなものは見当らない。そうしてみると、溝を掘った際、土砂は溝の内側ではなくて、外側に積みあげたのであろう。こうしてできあがつた景観は、家々をとり囲む幅約四メートルの溝があり、その外側に堤が築かれてあつたことになる。後代の防禦的につくられた例にみるように掘の内側に堤を築く方法と比べると、一見奇異な感じをうける。しかし、安満のように低湿な集落の立地条件を考えると、集落の排水・排湿のためにはま

ず溝を掘りめぐらす必要があった。しかも住居地域に獣類等の外敵が侵入しないためには堤をめぐらすことも必要である。堤の効用を強化するためには堤に柵を設ければよかった。このようなムラの景観はあたかも輪中集落にも似たものであった。堤と堀で外界と区別された内中央に家が配置され、人々は門から出入する。そして堤の外辺に水田を造成しているというのが当時のムラの景観であった。

ムラの系譜

こうしたムラのたたずまいは、縄文時代には認められない。弥生時代になって、はじめて現われた形態である。その系統のムラを弥生時代初期の板付遺跡のムラまではたどることはできても、それから先はどうなっているのか、目下のところ明らかでない。その理由は、弥生文化が育まれたとみられる朝鮮半島や中国の様子が明確でないからである。ただ中国の新石器時代の遺跡には、西安・半坡遺跡のように、住居群の外周に大きい溝をめぐらしたものがあるから、あるいはそうした形態が弥生文化のムラの形にまでつながっているのかもしれない【原口正三「土木技術」『日本生活文化史』1】。

ムラの規模

安満遺跡の大溝は幅約三・五メートル、深さ約一・二メートルのもの（外側——A溝）と、幅約四メートル、深さ約一・二メートルのもの（内側——B溝）と二本ある。A溝とB溝は連結せずに環状にめぐっていたと仮定すると、A溝は長径一五〇メートル、短径九〇メートルの長楕円形、B溝は長径一一〇メートル、短径七〇メートルの隅丸長方形に復原できる。A溝で囲まれた面積は約一万平方メートル、B溝の場合は約六〇〇〇平方メートルである。板付遺跡の環溝の復原案によると約六六六〇平方メートル、弥生時代末期とされる福岡市野方中原遺跡【福岡市教育委員会『野方中原遺跡調査報告』】の場合は約八〇〇〇平方メートルとみられるから、弥生時代の環溝集落の面積はおおよそ六〇〇〇〜一万平方メートルぐらいということにな

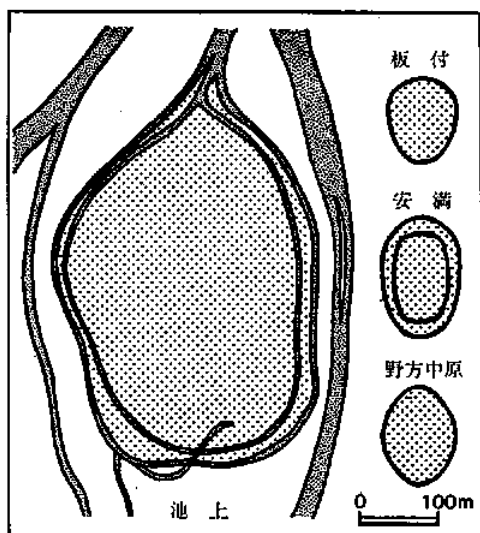


図68 ムラの規模の比較

加とも関係しているのだから、池上遺跡のような方向をとらずに、他に分村する場合もあって、集落成員の増大は多様な現われ方をみせる。池上遺跡のように巨大化した場合、環溝の内部が果して住居のみで構成されているのか、あるいは住居のほか畑地のような耕地を交えているのかなど、なお明らかでない。これまで環溝集落の内部を完掘した例はないから、内部の住居数や、集落人口の推計は不可能である。だが環溝域内の拡大化が人口の増大に比例しているとした場合、果してその集落構成員の社会構造や組織が従来のままだったのだろうか。この問題は中期の集落のところであらためて考えてみよう。

る。ところが、大阪府池上遺跡にも中期とされる溝二本があつて、井藤徹氏の復原案によると、内側の溝をとった場合でも面積は約九一〇〇〇平方メートルと計測される。それは安満遺跡A溝の九倍の面積であり、池上遺跡の外側溝だと約一一万平方メートルにもなつて、安満遺跡A溝の二倍以上に相当する。こういう面積の巨大化が池上遺跡にのみ固有なものか、にわかに断定できないが、平地の集落が中期に拡大する現象は一般的に認められるから、あるいは池上遺跡の場合もそうした傾向を示しているのかもしれない。中期の集落規模の拡大化は人口の増

これまで例示してきた諸集落の環溝について付加すべきことは、それらの平面形には、いずれも図形を対称化する軸線とでも呼ぶべきものがあるらしいことである。前期の板付遺跡でも、中期の池上遺跡、後期の野方中原遺跡も、いずれも長楕円形であって、集落の外圍を決定するのに、ある程度計画があつたのかも知れない。もしそうだとすると、溝の掘削にあたつて、予め集落の範圍を決定する何等かの規範があつたろうし、その作業の遂行に際しては共同作業に従事するムラびとたちの間に、共通の認識があつたことを認めなければならぬ。長軸と短軸の比が五対四とか四対三のような地割があつたのだろうか。

大溝の埋没

断面台形に掘られた溝は常時水を湛えていたかどうかは疑わしい。豪雨時には雨水が流れ込むことはあつても、ふだんは干上つていただろう。溝の底からおびただしい木製品や土器が検出されたが、溝の全域にわたつて検出されるのではない。溝の他部分には全く遺物のないところがある。その状況から判断すると、ある時点で溝に廃物を投棄した結果、遺物の堆積をみるにいたつたのだろう。つまり「ゴミだめ」らしい。出土する遺物も満足な形をとどめているものは少ない。柄の折れたクワや割れたスギ、使い古した石斧・手斧ちようこの柄、折れた弓、破損した容器などが目立つ。これは木器だけではない。石斧も折損したものが多く、こうさまざまな物を投棄したとなると、往時このあたりは異臭を発していただろう。この溝に円滑な排水の機能を期待することはむずかしい。その結果、再び溝の掘り替えがおこなわれることになる。おそらくゴミだめの近くに住居があるのだから、溝の堆積をみると、果して溝内を浚えたり、それを維持するための管理などがおこなわれたか疑わしい。

大溝に木器類が堆積し始めてから、徐々にこの溝は浅くなり、その上面に土器や石器なども棄てられてい

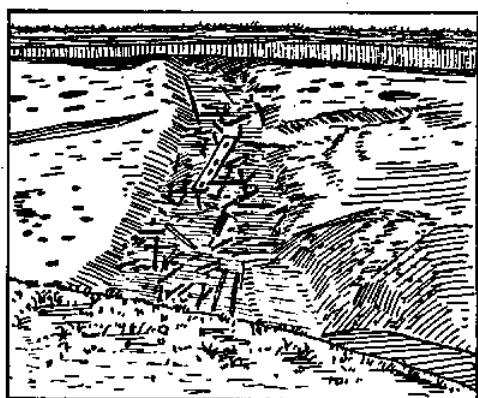


図69 埋没した大溝（安満遺跡）

洪水は大溝だけを埋没させたものではなかった。そこにあった人々の生活を破壊し、ムラを砂礫で蔽ってしまった。中期の人々は、この砂礫層を貫いて柱をたて、新しいムラを築くことになる。

環境と利用 弥生時代前期の人びとが使った道具にはさまざまなものがあって、使う目的に応じて道具とした樹種 材質を巧みに活かしている。まずその例を木器でみてみよう。安満遺跡やその周辺の花粉分析結果によると、前期（新）の段階にはマツが比較的少ない。マツは花粉生産量の多い植物だといわれるから、その出現率が低いということは、現在われわれが見る景観とは異なっていたことになる。それでは、主

った。その土器は前期（新）の段階のものが多くから、前期の終り頃には溝はほとんど廃物で埋っていたとみてよい。中期初めになると、この西で新たな溝の掘削があったものか、その時期の土器や木器が埋没した溝が見つかっている。中期初めのころ、大溝の北にあった川が溢れ、激しい水流とともに運ばれた土砂のため、大溝は埋没してしまった。以来、この川は大溝の上を東へ流れるようになったのであるが、川の流路の変更を誘発したのは、人為的に掘られた溝自身だった。川の氾濫は安満だけでなく、大阪湾周辺の前期末～中期初めの低地集落では、洪水に見舞われた痕が見つかっているから、そのころの一般的な状況だったといえよう【瓜生堂遺跡調査会】。

Ⅰ 考古学からみた原始・古代の高槻

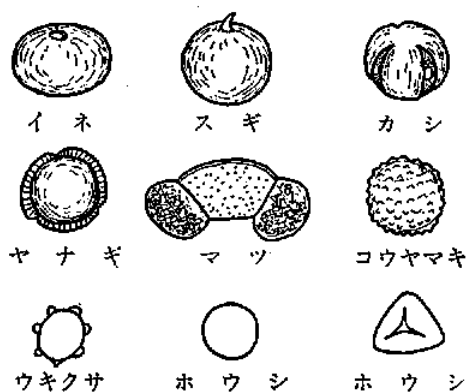


図70 各種の化石花粉

としてどういう樹木が多かったのだろうか。低灌木のヤナギが多いのはイネ科雑草や胞子類が多いことと関連していると考えられる。それらは湿原地帯に茂生する仲間だから、ムラの周辺には湿地がひろがり、イネを栽培するのに適していたようだ。樹木ではコナラ属が目立っている。「分析結果ではコナラ属のうち、約八〇パーセントが常緑のコナラ属であったことからカシの生育は一応考えられる」という〔徳丸始朗「考古学」と花粉分析〕。カシはコナラ属の樹木である。クワやスギ・手斧・斧の柄にカシ材が用いられているのは、堅く、しかも弾力のあるカシの用材が容易にこの近辺からまかなわれたことを物語る。

このほか、スギやクリなども注意にのぼっている。スギはヒノキなどと同じように日蔭で幾分湿った土地に育成する樹種である。まっすぐな木目に沿って割ることは容易である。安満遺跡で検出した木片の中には、かなりの量の針葉樹の材があった。樹種の分析は完了していないが、ヒノキなども利用頻度の高い樹種だったのだろう。唐古遺跡でおこなわれた樹種の鑑別結果では、容器類にはケヤキを中心にサクラ・クワ・ケンボナシ・ヒノキ・イヌガヤ等を用材とし、耕具類にはアカガシ・シラカシ・イチイガシ・アラカシ等のアカガシ属を用いていた。このように用途に応じて樹種を区別していたことが知られている〔岡謙二郎「大和唐古跡生式遺跡の研究」〕。

伐採

ムラの周囲にある樹木を伐り倒すには石の斧や楔くわを使った。石の斧は実際に使ってみると想像以上によくきれる。直径一五センチメートルぐらいの松を実験的に切った例では一〇分前からなかったから、往時の手なれた連中だったらもっと速いだろう。ただ鉄の斧と石の斧とでは樹幹に対する刃の角度が異なる。石斧を鉄斧のように使うと切れが悪い。そのため石斧で切った切口は鉄斧のようにシヤープではない。発掘品の中にも石斧を用いて切断したと推定される切口を残すものがあつたが、その切断面は凹凸が著しい。

木取り

伐採した樹木は適当な長さに切断し、木の組織に従って放射断（柁目）した。鋸のない人々にとって、木を切断するには木目に沿って割截するより方法はない。こうした労働はおそらく男性に委ねられた分野であつたろう。柁目に割った断面三角形の板材は樹皮のついたまま放置されたい。目的とする器物に備えて、粗く削ったままの素材や、クワをつくる素材が見つかつている。

クワやスキなどをつくるには、断面三角形の板材の厚い方をさらに薄く割取り、中高の面をつくり、数個分の舟型隆起を削り出した。容器をつくる場合の木取りは、かつて唐古遺跡で指摘されているように、亀裂を生じやすい心持材を避け、「木材の半径の方向に縦断した柁目を呈する面を口縁部の上面として器形を刻出」している。

木のひずみを考慮すれば、乾燥してから加工する方がよい。弥生時代の木器未成品と一括されるものが概略の形だけにとどめてあるのを見ると、木器製作の一段階として形を粗くとのえて乾燥を待ち、その後最終的仕上げに入つたように解される。例えばクワの身部を四個分も一挙につくった例が認められる。クワ

さまざまな段階を示す未成品のあるのは、その一端をみせているとも解される。匙や杓のような柄を伴うものでは、身・柄とも一木で削り出すのだから、生木の間に木目に従って予め削り出す作業があったのだろう。クワやスキ・斧の柄のような柄をすげたり、石器をはめこむような場合は、はめこむ対象の大きさによって、それに見合った孔を削りこんだのだろう。特に斧や手斧の場合は相手が石製の部品であるから、堅いカ

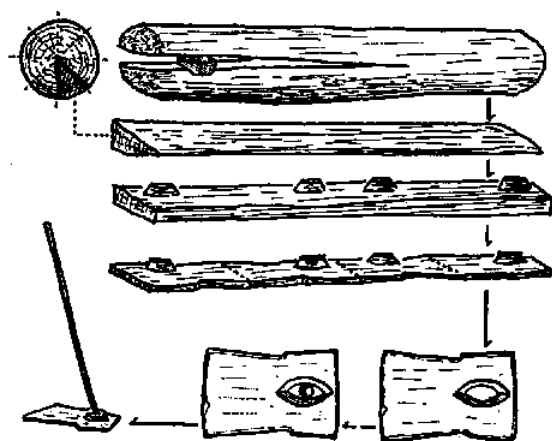


図71 クワのつくり方

の柄を装着するための舟型隆起を一枚の板に四つ削り出した素材は、クワの製作で途中の段階——つまり形の粗削りと乾燥の期間——のあったことを示している。このように数個分をつなげてつくる例は、唐古遺跡や滋賀県大中^{だなか}ノ湖南遺跡^{（の湖南遺跡調査概要）}「大^だ中」などにもある。しかし、実際に柄をすげて使用するまでには、四つを個々に切り離す段階があった。クワの未成品として、柄孔のないものがあるのをみると、平時は柄孔をあけずに保管してあったのだろう。木器の製作には、農具とか容器、狩猟用の弓など、製作する対象に従って、異なった手順があったようだ。もし原木の伐採がある季節に集中しておこなわれたとすれば、その後におこなわれる木器製作の作業もかなり季節的な周期性をもった労働として展開したかもしれない。各種のさ

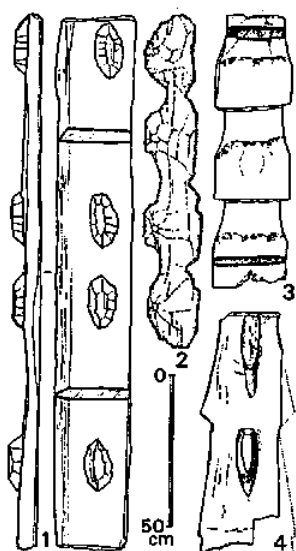


図72 クワの未成品（1安
満、2大中ノ湖沼、3・4唐古）

め粗く外側を削り、内部をナカキリするには刃幅の狭いノミ状の道具を使った。その痕跡をとどめたものがある。この段階はあるいは女性が分担したかもしれない。この時期に横軸回転の轆轤が推定されているけれども、安満の高杯でみる限り、その使用は認められない。高杯の身の円軸と脚の円軸にはずれがあり、回転による円形の削出しを主張するには整齊でない。その表面は丹念に削って磨き、黒漆をかけてあるが、他の例では黒漆を地塗りした上に赤色顔料で木葉状の連続文様を描いてある。漆の使用は美しさだけでなく、木器の堅牢さを増す。しかし木製容器は一般には木地のまま用い、むしろ木目の美しさを求めたものではなかったか。また、安満遺跡の前期のムラから検出された朱漆塗りの櫛や簪は、縄文時代のものとの連続が認められる。

これまで述べた弥生時代前期にみられる木取りの技法や漆塗りの技法、あるいは樹幹と枝の股木を利用した石斧の柄などは、縄文時代前期に属する福井県鳥浜貝塚や縄文時代晩期の滋賀県滋賀里遺跡にみられるか

シの柄の挿入部分を対象と見比べながら、鉄器を使って削りこんだものらしい。その工作は入念であって、石製部品の個々に適合するような個別的制作の見本みたいなものであった。また、柄を挿入し、抜けないよう固定するために楔でとめたものがある。

容器のような内凹みのものをつくるには、予

Ⅰ 考古学からみた原始・古代の高槻

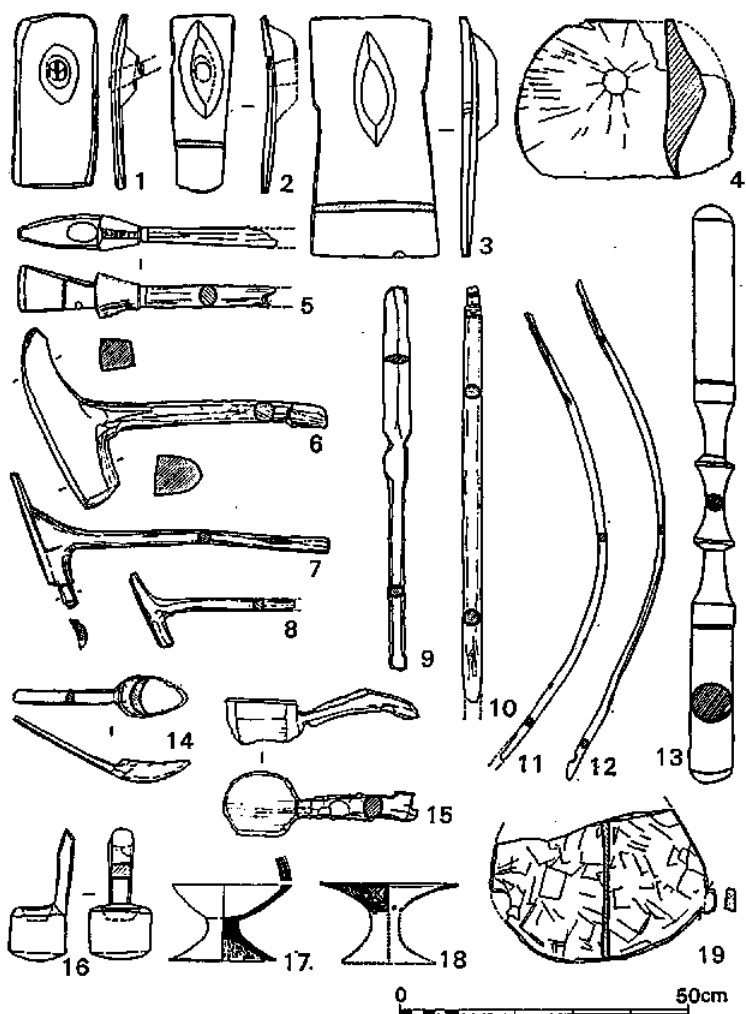


図73 安曇遺跡の木器 (1スキ, 2・3クワ, 4丸クワ, 5斧の柄, 6~8手斧の柄, 9木剣, 10~12弓, 13杵, 14匙, 15・16杓, 17・18高杯, 19面板)

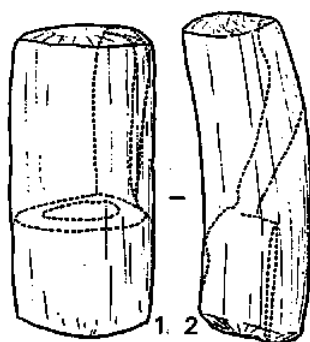


図74 容器の木取り

どこで採掘され、また何種類の粘土を混合し、混和材として混ぜられた砂がどこからとられたかということ
は、土器片や遺跡一帯の粘土や砂について全く分析されていない現状では、何等断定できない。まして採取
地から土器製作地までの粘土の運搬や選別・素地の作製過程等は今後の研究に委ねざるを得ない。

ひろく世界各地では土器製作は女子の作業であることを参考にすれば、安満の土器もまた女子の手になっ
たといってもよいだろう。

壺をつくるにはまず厚手の円盤をつくり、その周りに粘土紐を巻きあげて外開きの鉢状の下半部をつく
り、やや乾燥したのち、粘土紐を巻きあげながら頸部へむけて内すばみにつくりあげ、再度固まるのを待つ
てのち、粘土紐をおいて頸部から口縁部をつくった。この三つの段階はさほど時間的に長いアキがあったと
は思えない。つくりあげた土器の外表面は固くて平滑な面をもつ道具——例えば骨や竹筥など——で横方向に
なでて表面を滑らかにした。その意図は土器表面を緻密にし、壺の内容物の保存に役立たせることにあるら

り、前代からの技術的伝統に負うていると考えられる〔田辺昭三「手工業
『日本生活』。だが、クワ・スヤなどの農具や大陸系磨製石器を装着した
文化史」〕。柄による組物製作の技法は弥生文化固有の技術であった。

土器づくり
土器の製作は弥生時代前期にはどのようにおこなわれ
たのであったか。安満遺跡の前期の土器をみると、一

般に砂粒の混入が目立つ。壺でも甕でも似た状況にある。ただ形の大
・小に対して多少の差がある程度である。本来用いられている粘土が

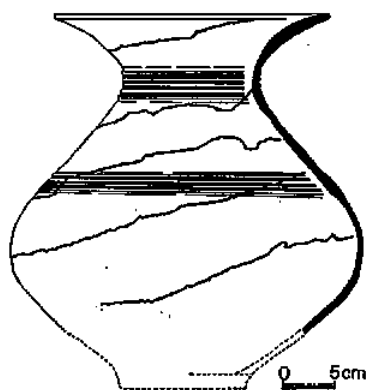


図75 前期の壺のつくり方(安満遺跡)

しい。各段階の境界にあたる二つの部位に竈状の器物——平滑にする道具と同じ物かもしれない——で横に、一本一本が完結する沈線をめぐらす。

煮沸に用いる甕の場合も円形粘土盤を基本に、粘土紐を巻きあげて口の開いた形をつくり、口縁部を紐一本分程度外側へ折りひろげたようにつくる。この端部に往々刻をつけるのは、粘土のひび割れを防ぐためだという。外面は縦になでて調え、内面もなめらかにする。口縁部の下方外面には壺同様の沈線がつけられる。

できあがった土器の乾燥は、直射日光にあてたか、陰干にしたかは判らない。土器の底面などに靱が付いているところを見ると、製作時、靱が散らかっているような状況下にあったことになる。それが単に場所の問題なのか、季節まで表わすのかは不明である。一応こうしてつくりあげた土器は十分に乾燥したあと、数個を寄せて焼く。焼き方もまた詳細は明らかでない。まして、燃料や焼く作業、関与する人員や労働のしかたなど推測の域を出ない。摂氏約六〇〇〜八〇〇度の温度で焼きあげた土器を、まだ熱いうちに棒ではさんで取り出したから、土器の表面に相對して黒斑があると説く人もあれば、焼成時の燃料である樹枝の影や、火まわりの加減によるとする説もあって、一定しないが、表面はなお不均一な焼きあがりを示している。もし焼成のための穴を掘ったとすると、内面の焼けた穴の遺構や焼灰の痕跡がありそうなものだが、いっこう

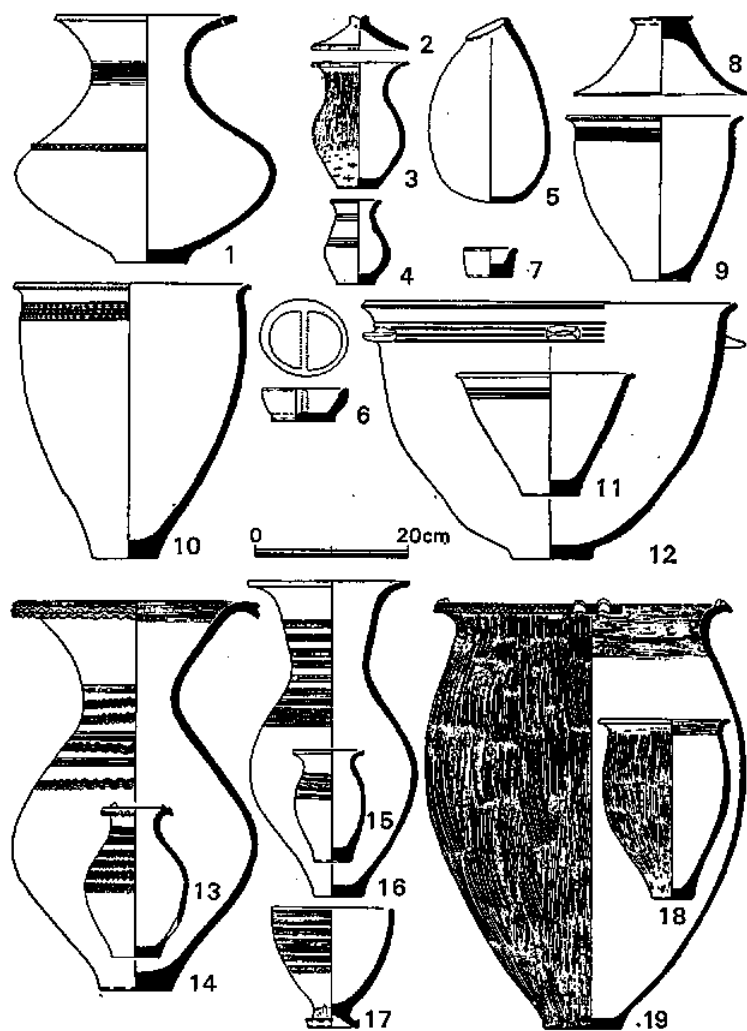


図76 前期 (1~12)・中期 (13~19) の土器 (安濃遺跡)

にみないところを見ると、平地で小規模に焼いたのかもしれない。また、土器の大きさも不均一であって、量産化による形態上の特徴はみあたらない。ここにもまた、個別的な製作の姿をみることが出来る。さきに木器でみたように、土器生産も季節的労働の産物だと仮定した場合、予め生産する量や形態が見込まれてあったのかもしれない。しかし、どの程度の需要率があったか不明な以上、その生産の実体はまた不明というほかない。

こうしてみると土器の製作は判らないことばかりである。土器が考古学研究の上で果たしてきた役割は絶大であった。しかしよく考えてみると、その主な部分は文様や形態によって相対的な年代の前後を決めることや、地域的な相互の関係を探しだすために用いられてきたといってもよい。土器の生産それ自体を問題にしてきたとはいいかねる。土器は粘土の可塑性を媒体として最もよく人々の動きを表出した器物であり、その脆さは損耗度が高いが故に、時間の変化をあらわす最良の資料であるには違いない。腐らないこと、分量の多いこと、どこにでもあることは資料としてすぐれている。だがひとたび土器製作の技術や生産の問題になると漠然とした答えしか返ってこないのが現状である。最近、漸く土器の理化学的研究が始まった〔沢田正昭「遺物の保存科学」(2) 、『考古学研究』一九九五〕。やがて、生産地や製作技法などに関する豊かな情報が提供されるようになるだろう。

石器づくり

石の道具もまた古い歴史をになっている。前の時代にもあった石鏃・石錐・石斧などの他に、新来の石製の道具が登場する。柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・石鏃丁といった石の道具は、みな大陸や朝鮮半島に関連するところから、一括して大陸系磨製石器と呼ばれている。

弥生時代の石斧が縄文時代の石斧と異なるのは、まず大型であって火成岩を素材とした例が多いことであ

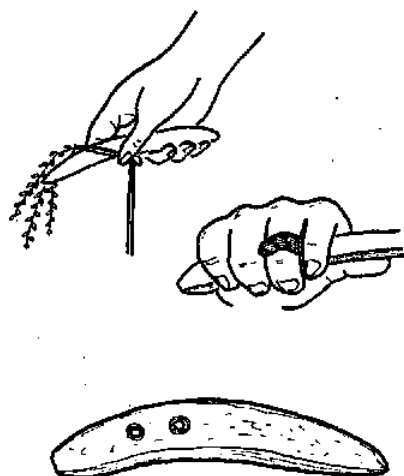


図77 石庖丁のつかい方

る。太型蛤刃石斧^{（おなまがばやし）}と呼ばれる石斧が樹を切り倒すのに偉力を発揮したことはさきに述べた。安満遺跡ではその製作途上にある未成品が検出されるのみならず、素材となる石材が安満北方の山丘や松尾川の流路にあるから、太型蛤刃石斧や柱状片刃石斧などはこの地に産する材料で作られたことが知られる。また、粘板岩製の石庖丁もその素材は北の丘陵部に産するから、自給は容易であったろう。ただ、石鏃や石錐、剥片石器などのようにサヌカイトを用いた石器については、依然二上山近辺から素材を手せざるを得なかった。刺突具にサヌカイトを用いるのは、この石材が打裂によって鋭利かつ強靱な刺突部をつくるのに適合していたからであろう。また穂摘み具である石庖丁に板状にはげる性質の岩石を利用したのは、片理面を生かすこと

によって容易に同一平面上に刃部をつくれることによるのだらう。太型蛤刃石斧に鈍重な火成岩を利用しているのも、衝撃の強さを期したのであろう。そこには石の道具それぞれの機能に応じて、石材を選択し、しかも必要なものについては、遠方の素材をも入手している状況がうかがえる。

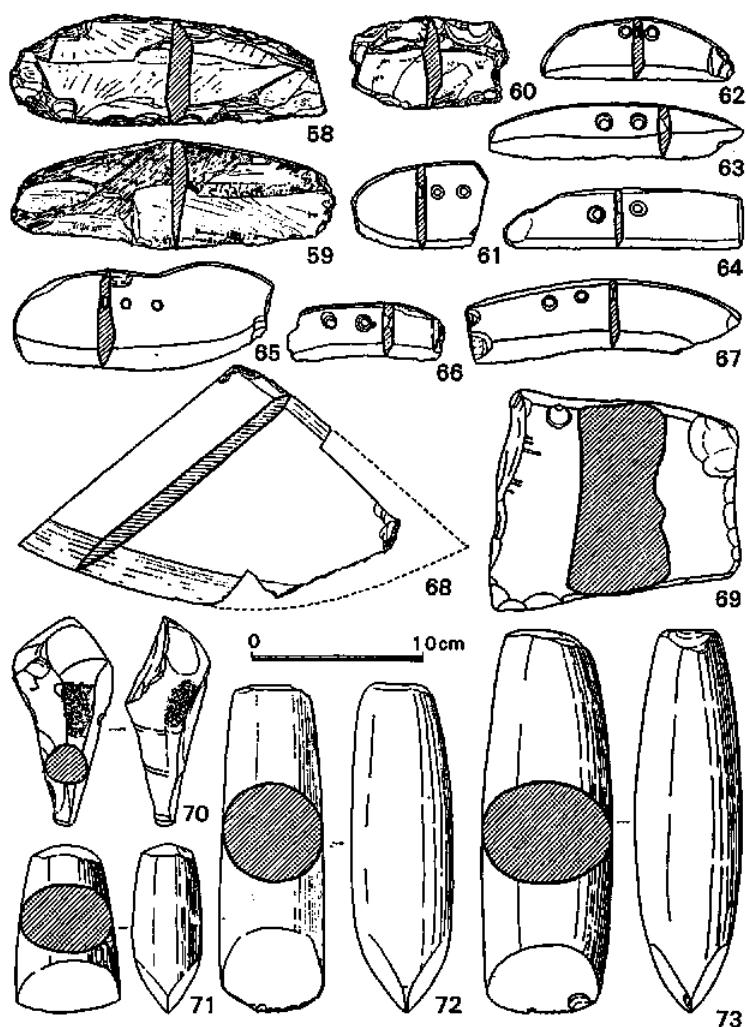
石器の製作工程を太型蛤刃石斧でみると、川原から適当な軋石を採取し、粗く打欠いて大略の外形をつくり、更にその表面を敲打して、刃部にいたるまで丁寧な形を整え、のち、刃部を中心に研磨して一本の磨製石斧を仕

上げる。柱状片刃石斧の場合もほぼ同様であって、その形は敲打する段階に決定的になる。この敲打する道具がどのようなものだったかは明らかでないが、円縁に打痕があるものがその道具だった可能性がある。石庖丁の場合は中期の例でみると、片理面に沿って剥離した板状の石片を打欠いて外形をつくり、これを磨研してのち、紐孔を穿っている。前期の例では磨研の不徹底なものもある。

さて、磨研に用いられた砥石には砂岩のものが多く、砂岩はこの近傍に産するから、利用には事欠かなかったであろう。柱状片刃石斧の中には、研磨面に三様の違いがあるものがあるから、仕上げ部分に應じて、砥石をかえたことも考えられる。また石材に應じて砥石の材質も異なっており、砥石の使用法にもいろいろあったことがうかがえる。

以上にみるように安満では石器もまた、自家供給的な生産形態をとっていた。そして石器の製作は、石材の採取から道具として仕立てるまで、一貫して男性の手によっておこなわれたのであろう。そこには弥生時代前期の社会はなお自然的分業を基本とする段階にあったことを示している。素材がこの地でない場合はサヌカイトのようになり遠方からでも塊状の原石を選び、ムラで製品化している。こうしたやり方は弥生時代の他のムラでも一般的にみられる。

前期の人びと 縄文時代の生活に季節的な生活カレンダーがあったように、弥生時代にも生活カレンダーがあったに違いない。それは、農耕という季節的制約をうけるだけに、いっそう重大な意味をもっていた。春の播種・夏の育成・秋の収穫というイネの栽培に伴う生活の輪廻は、その生産の形態を規定したのであろう。それと一方では、男女の性別や年齢階層による労働の区分は自ら、弥生時代の生産活動の特



石小刀, 39~41石槍, 42・43剥片石器, 44有腿式石剣, 45環状石斧, 46勾玉(硬玉), 55柱状片刃石斧, 56・57石剣, 58・59石胞丁未成品, 61~67石胞丁, 68大型石胞丁, 遺跡, 38・41・44・50~52・56・72・73天神山遺跡, 53津之江南遺跡, 54塚原遺跡]

I 考古学からみた原始・古代の高槻

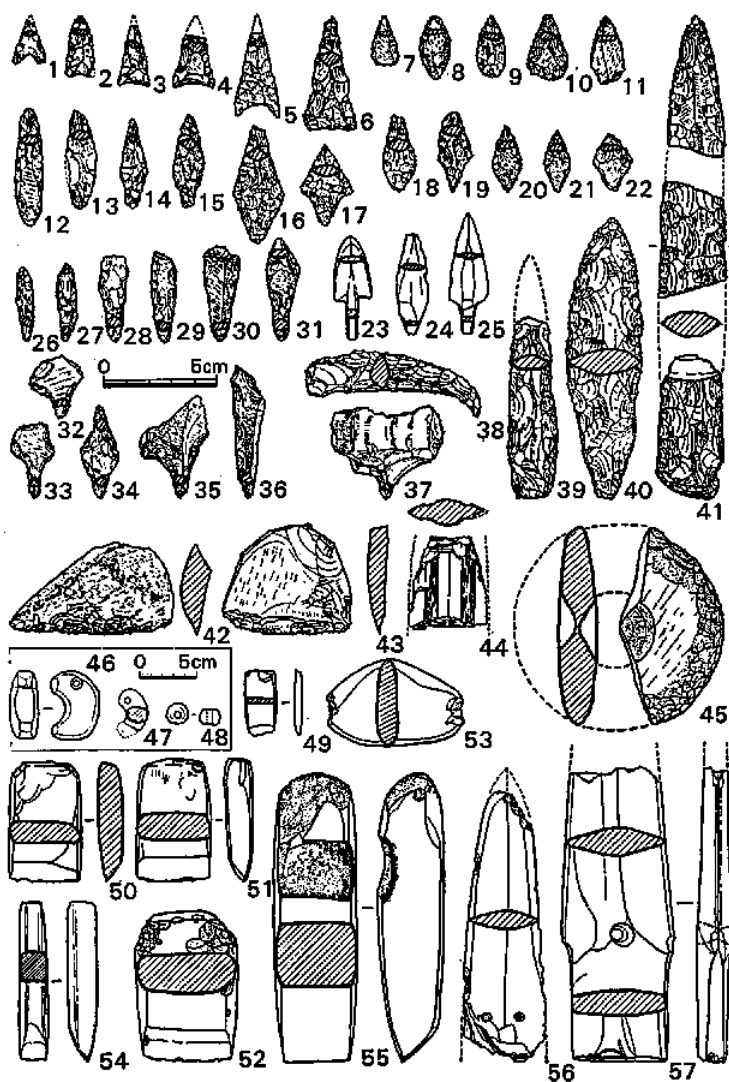


図78 各種の石器 (1~22打製石鏃, 23銅鏃, 24・25磨製石鏃, 26~37石鏃, 38
47勾玉(ガラス), 48小玉(ガラス), 49~52扁平片刃石斧, 53大型石鏃, 54・
69砥石, 70大型石鏃) [1~37・39・40・42・43・45~49・55・57~71安満

色づけたと考えられる。農業に生産の主力が移り、それへの依存度が強まりつつあったとはいえ、狩猟の分野もなお重要であった。集落外から移入したサヌカイトの原材をもってヤジリをつくる作業は男たちの仕事であった。幼い男の子さえ、石のヤジリをつくる技術を修得するため参加したであろう。大きなシカやイノシシの猟には、ムラの男の総力が寄せられたに違いない。安満の大溝の中にはイノシシの頭骨が投げこまれてあった。冬枯れの木立の中を走りさる獲物を求めて、男たちが矢を放ち、石のヤリを投げたのは、縄文時代の男たちと同じだった。しかし、春のイネの播種に先立つ、泥湿の水田の地ならしもまた重要な仕事であった。霜のおりなくなった時期、野山が新緑におおわれるようになるまでに、昨年の田をつくり直し、新たに水田をひらく作業がはじまる。それは草や水草とのたたかいであり、新たな開墾にも近い作業であった。管理しない水田は、荒田をひらくに等しい。労働の投下は際限もなくつづく。そこから、おそらく水田の越年経営のため、水を張って翌春の耕作を容易ならしめる工夫があったであろう。水田耕作の開始に伴う、耕地の維持は、当時の人々が最も腐心したことであった。まして徐々に増加する人口に対応する耕地の拡張は、新たな耕地開発への計画性を要求したであろうから、必然的に耕地拡大に伴う、労働の組織的運用を強制される。それは、狩猟のための組織とは異質であった。栽培する植物の性質に対応して、人間の営みがすすみはじめたとき、一年の季節的労働は狩猟的縄文世界以上に、暦日の刻みを細やかにしはじめた。おそらく、そうした意味でも弥生時代前期の社会には、季節の読み手が誕生していたであろう。

季節的周期性をもった生産労働は固定した枠組をつくりあげ、一定の規制を前提とするようになった。ムラの掟は厳然とした重みをもってムラびとの前にあらわれた。土器をつくる女たちが、どれも等しく形や文

様に超個人的なものを備えているのは、どの女たちもそのルールの上に存立していたからである。ヘラで一本一本丹念に糸線を入れる意味は、老婆から娘たちへ伝えられ、糸線をつけることが、ムラに通用する普遍性をもつと判断された。弥生後期を除けば、前期や中期に大型の甕や鉢が目立つのも、ムラ共同の炊飯があったことを示すと推定される。何回かおこなわれる共同炊さんの行事も、播種や虫追い・収穫の共同労働と不可分であつたろう。

農具をつくる男たち、織物や土器をつくる女たち、と区分された性的分業があるといつても、田を耕し播種するのに女たちも加わつたであらうし、粘土をとり、焼き上げるための燃料の採集には男たちも参加したのであろう。まして堅穴を掘り柱を建て屋根をふく作業は、男女の協同、ムラの協同のうえにつくりあげられていったに違いない。

安満遺跡から検出された火鑽臼は、彼等が火をつくるのにどれほど苦労したかを物語っている。煮沸の用に供した甕形土器には、外面に厚い煤がつき内側には煮物がこびりついたあとがある。甕の底には煤がついていないから、おそらく炉の灰の中に埋めこんで、周りで火を焚いたのであろう。コメもまた煮て食べたかと推定される。

織物をつくるための機織の道具がある。肩幅より狭い経糸の並びに緯糸をうちこむのは熟練を要した。腰で経糸を緊張させ、偶数糸と奇数糸を上下させる間に緯糸を通し、平織の織物をつくる作業もおそらく女子の作業であつたろう。果して織る前に糸を染めたか、織りあがりの後に染めたかは判らないが、草木の樹液



図79 土器に描かれたシカ（安満遺跡）

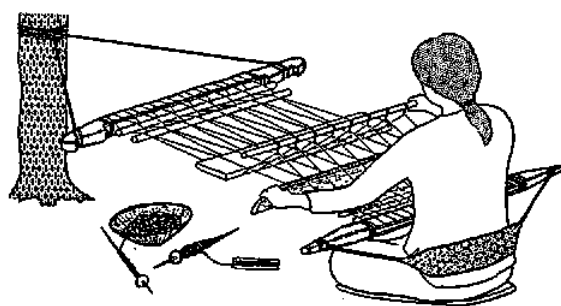


図80 機織（想像図）

の利用ぐらいいは知っていたであろう。

髪にカンザシをかざし、朱漆塗の櫛をさすことは、縄文時代にもあった。それはムラのひとすべてに許されたのではない。そうした装身具は特定の身分を表示していた。本来、朱砂をつくりウルシに混じて器物に塗布することは、ある特殊な意味をもっていたのであろう。黒い煤を混じて黒漆を塗ることと、赤い顔料を用いて器物や図柄を表出することは、土器であれ木器であれ、それを神聖化することであった。そして他から区別された、この神聖な器物に手を触れ、それを身につけ得るのは特定の人物であった。黄金の光を知らなかった弥生人にとって、朱の赤色は聖の輝きを暗示したであろう。彼等のとりおこなう祭祀や饗礼が、どういうものであったかは判らない。しかし農耕にまつわる祭祀・饗礼や狩猟饗礼の中に縄文時代以来生きつづけた形態が存続していたと想定することはできよう。生殖の所作に、稲魂の再来を祈念したり、繁殖する例から遡上してその想定は容易である。また年令階層に応じた労働や儀式もあったであろう。縄文時代以来みられる抜歯の風習も、成年への通過儀礼としてなお存続していた。ひいてはムラの中で若者組の住家と婦女子の住家の如き棲み分けもなおあったかもしれない。

I 考古学からみた原始・古代の高槻

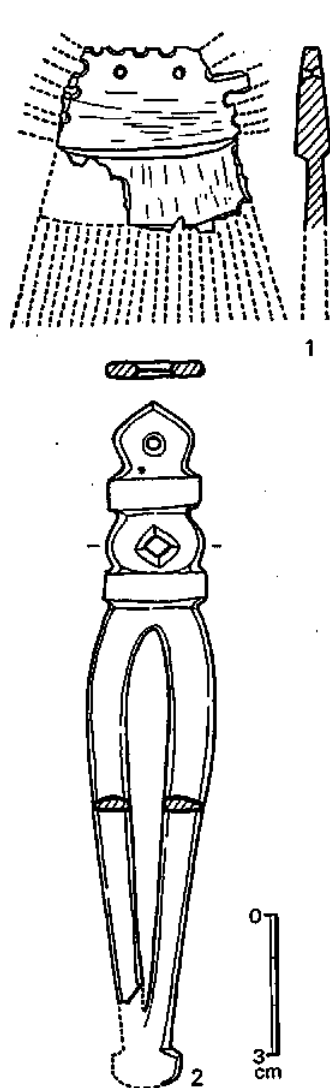


図81 クシ(1)とカンザシ(2)(安養遺跡)

婚姻がどのようにおこなわれたかも明らかでないが、中期初め(第二様式)になると、夫木市目垣に安養遺跡と類似の土器があり、京都伏見の深草遺跡の土器との類似が指摘できるから、淀川を媒体として女子の往来に嫁取り婚があったと推定される。なかでも目垣の土器の同姓性は、深草例とは異なり、同一性が高いから、安養と一体的な婚姻上の共同性をもっていたと推定できる。そうすると大略当時のムラの同族的結合の範囲は三島平野を包括し、それより上流の京都南部との交渉のうえに婚姻圏をひろげていたといえよう。こうした中期初めの情勢は、前期の段階に培われていたとみてよいであろうから、人間の移動もその範囲で反響されていたし、文化の伝統・慣習もその範囲で地域性を形づくりはじめたと考えられる。

人間の往来のためには淀川の果たした役割は大きい。そのための舟運は想像以上に重要な意味をもっていた。文化の相互移入・干渉はあり得たであろうが、内陸へ行くほど縄文文化的色彩は濃厚に残留していたで

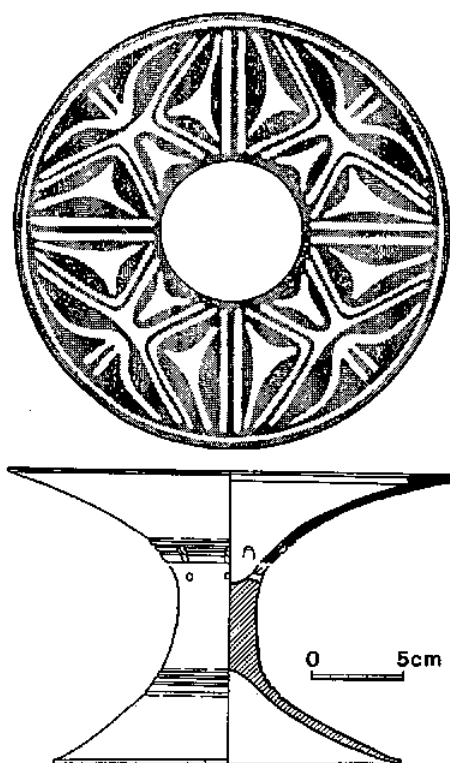


図82 彩文器台 (安満遺跡)

て、たちはだかる自然の皮肉な偉力が、彼等の財物を一瞬にして喪失させる場合、その偉力に対して恐怖の観念を感じずにはおれなかったであろう。前期の期間がもし一五〇年間つづいたとすれば、一五〇回の播種・収穫と、それに倍する台風やその他の災害を見込まねばなるまい。雄々しい弥生人たちのその後の発展は、彼等がよくそれを突破したことの証拠である。自然の脅威に打克つ間に得た経験は、中期に花ひらくことになる。

徐々にではあっても人口は増加したし、中期のムラは一段と規模が拡大する。人口の増加は耕地の拡大に結びつくであろうし、互いに促進する作用をもつ。従来のムラのしくみも変質せざるを得ない。ムラの首長

あろう。安満のムラの災害は、連帯したムラの間には重大な響きをもった。火災は弥生のムラにはつきものだったし、一棟の燃焼はさほどの影響はなかったにしても、猛烈な秋の台風は家屋の倒壊・洪水・水田の埋没という形で、連帯したムラを等しく襲った災害であった。総りを前にし

と一般成員との関係も、集会の規模が小さいときといまや拡大した段階では、その機能に大きな差を生じはじめたであろう。もっとも深刻な問題は富の分配であった。縄文的な生産法を残滓として保持しながら——例えば一頭のシカ・イノシシの肉の分配を想定せよ——一方では、投入される稼働労働力に比例しない耕地からの収穫の不安定性——労働組織の未熟さによる収穫の不拡大および不安定さ——は、前期のムラの分裂を推進する内在的矛盾として、ムラびとたちを蝕みはじめていた。共同水利の管理体制の脆弱さは、一天の暗雲によって容易に破壊され、洪水の砂礫下に水田を埋没させた。そのとき、彼等が生きのびる手だては、人口の適当な分割であつたろう。こうして中期のムラの分立を促すヒキガネが用意されていた。

第二節 ひろがるムラ

中期の土器 前期の段階に伊勢湾沿岸まで波及した稲作の技術は、中期にいたって漸く北方へ拡大すると地方色 それと同時に、弥生文化の地域色が顕著になる。畿内の弥生土器について、第二様式から第三・第四様式までを中期として包括することはさきに述べた。第二様式の土器について、大阪府池上遺跡では新・古の二つに区分されることが報告され、第三様式もまた新・古に両分する案がある。以下で細分の必要な場合、新・古に（ ）を付して記述しよう。なお、中期の年代については、前期との境を前一世紀中頃としたあとをうけて、その継続年代を一四〇年間と考え、後期との境をほぼ紀元後二世紀中頃に推定している。

前期の土器は竈形の沈線が多条化する傾向にあったが、中期になると、櫛歯状の器具で複数の条線を一度

に描く手法がとられるようになった。いわゆる櫛描文と呼ばれる文様が盛んになる。また施文の際に、器具の上下運動を加えると波状文が、直進の運動をある間隔で停止すると簾状文が描ける。これらの文様は土器をゆるやかに回すことによつてつけられた文様である。土器に施文するために回転台を使ったとする説がある〔佐原真「弥生式土器製作技術に関する二」〕。しかし、回転台の構造がどういうものであったか、その詳細は明らかでない。もし回転台を利用したとするなら、つけられた文様から判断して、かなり精度の高い回転運動をなしうるものであったことになる。回転する製陶用具といえば、一般には轆轤を想定するが、轆轤は回転運動によつておこる遠心力を利用するのであつて、その力を生むためにはかなり急速な回転と、安定した軸構造が前提となる。しかしここでいう回転台は「回しながら作業ができるていどの台」と考えられている。

中期の土器も依然として粘土紐巻きあげによる成形を基本としていた。なぜ施文の段階にいたつてのみ、回転台を用いるのか。第二様式の土器の底部外面に木の葉の裏側の圧痕がみられるのは、土器製作に際して、回転を円滑にするためだと推定される。施文の段階もこの方法によつたとするなら、この木の葉の機能に回転台といわれるものが相当していることになる。轆轤によるのと粘土紐巻きあげによるのでは、仕上がった土器の円率には差がある。施文の深さがほぼ一樣であることをみると、後者の場合、同一中心上を回転させた場合に施文本体は土器面に対してかなり微妙な動きをすることになる。しかし、それほど正確な回転をなす機械構造をつくり得たか疑問だし、施文前に回転による表面仕上げがみられない。かえつて縦方向の表面仕上げがみられることも、回転台を使用しなかったことの証左であろう。

中期には櫛描きや粘土はりつけの技法が盛んに用いられるようになる。櫛描きの直線文・波状文・簾状文

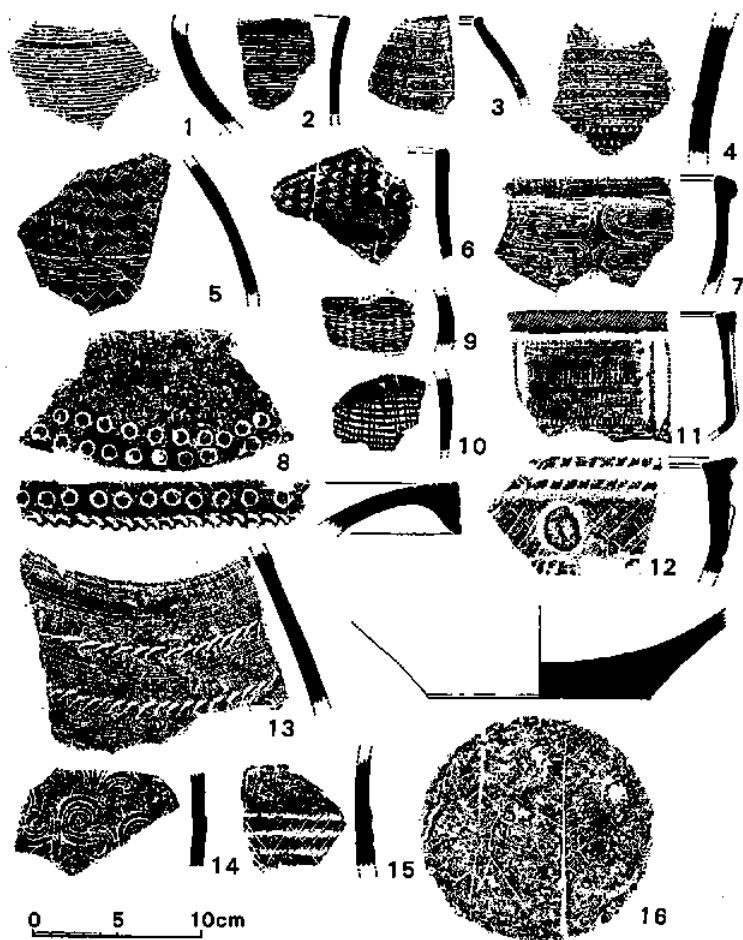


図83 土器の文様と木の葉の圧痕（1・3～8・11～16安満遺跡，
2柱本遺跡，9・10郡家川西遺跡）

のほか、斜格文や流水文・扇状文・列点文など、櫛描きの多様な手法がある。また粘土紐のはりつけを基本とした断面三角形の凸帯文があり、のちには浅い凹線を盛んにめぐらすようになった。粘土の丸い粒をはりつけた円形浮文や、粘土紐を縦にはりつけた棒状浮文などもあらわれる。このほか、円管の原体を擦した竹管文や、刻目を縹杉状に配したり、円孔や三角形の透孔をつけることさえおこなわれた。こうした中期の土器の多様な文様の表出は自ら、好んで用いられる文様の種類によって、時期的な前後や地域的特徴をつかむ手がかりを与える。

中期は、弥生土器の地方色がはっきりあらわれてくる時期である。各種の文様や器形によってみると、粘土紐をはりつけて断面台形の凸帯をめぐらす九州地方、櫛描文様の多様な表現をみせる近畿・瀬戸内一帯、縄文と櫛描文様を併用する東日本といった、大きくは三つの地域にわたれる。これら三地域も詳細にみれば、各々に細かい地域差がみられる。

安南遺跡をはじめとする中期初めの三島地方の土器をみると、中河内や大和に普通にみられる細頸壺がない。高杯が少ないことも特徴的である。中河内・大和にはないものに、口縁を斜めにつくった壺がある。櫛描文帯の間を磨研する手法や流水文・籠状文は三島地方では稀であって、専ら波状文や直線文を盛用している。また、壺・甕の口縁部側縁に棒状浮文を、口縁部上縁に二個一対の突起をつけるものがあつたり、底部に木の葉の圧痕がついているのも三島地方の特色である。こうしたいくつかの特徴を他の地域と比べてみると、三島平野の特異性が浮びあがってくる。中河内や大和では櫛描きの文様が多種であり、その文様帯の間を磨研することによって、文様を一層浮びあがらせる工夫がみられるなど、まさに櫛描文の中心地の感があ

I 考古学からみた原始・古代の高槻

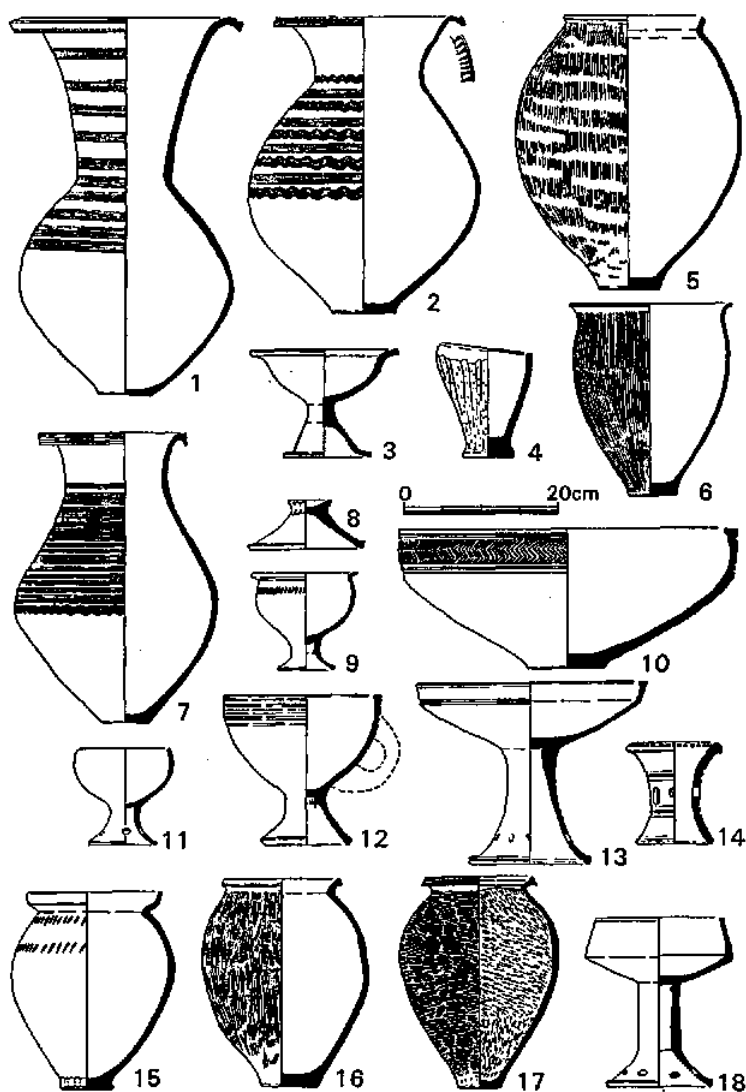


図84 中期の土器 (1・3・5・6 郡家川西遺跡, 2・4・7~10・12
安満遺跡, 11・13・17 芝谷遺跡, 14・16・18 古曾部遺跡)

る。これらの地域にみられる土器裝飾の豊かさの背景には三島平野のムラムラとは違った社会的条件が介在しはじめているのかもしれない。また佐原真氏によると、西摂平野の加茂遺跡・田能遺跡などの甕には木の葉の圧痕が認められないという〔佐原真・高井健三郎「考古学からみた伊丹地方」『伊丹市史』1〕。それにひきかえ、三島の土器の文様や底部の木葉痕は、淀川を翹った山城や近江の甕に共通している特色である。この煮沸の器具の同姓性は、淀川を媒介とする集団間の婚姻関係をも含むような、交渉の緊密さを示すとみてよいであろう。ただこの段階に中河内一帯からの外来の土器がないわけではない。明らかに彼の地の製作にかかる流水文のついた土器片が極く少数ある。しかしそれは壺のみであって、甕がない。このことは淀川上流域とは異なった物質の交換程度の交渉であった、と解してよからう〔都出比呂志「考古学からみた分業」の「問題」『考古学研究』125-126〕。

スキとクワ

安満遺跡には中期初めに属する数点の木器がある。そのうちスコップ形の鋤（A型）と身が平板で上辺に鋸形の突起をもつ鋤（B型）は、共に鋤身と柄を別々に作り、それを結合することによって機能を果すようにつくられている。柄と身を別個に用意し、それらを結合する点では鋤類と同じだが、着柄法が異なっている。鋤類では、穿った孔に柄をさしこみ、時には楔でとめる例があるように、柄孔だけで柄を固定する。これに対し、B型鋤では、鋤身中央に一孔を穿ち、上辺に鋸形突起を刻出し柄の先端を身の孔につきさし、鋸形突起と柄を裏で結びつけることによって、柄と身が約二八度内外の鋭角的な角度をもつようにつくられている。これと類似のものは池上遺跡にもある。また、やや形は異なるが似た着柄法をとる例は滋賀県大中ノ湖南遺跡にもみられる。A型鋤では内湾した身部とその上辺に突起をつくり、この突起にそって、柄を挿入できるよう溝を掘りこむ。溝の奥は袋状につくってあって、柄の先端は溝

の奥でひっかかるようになっていた。このA型鋤のソケット状構造は、B型鋤のそれより一層手のこんだ工作であって、金属製の工具を使用しなければつくれないであろう。A型鋤もB型鋤も身と柄の取付角が近似し、いずれも鋤身の右側の磨耗が著しいことから、その使用法は似たものであったと思われる。しかもA・B型とも、柄の先端を力点にしてその上方を緊縛する柄の装着法は、よく似た仕組みになっている。奈良県唐古遺跡（かど）のスコップ形鋤の柄については、欠失しているので不明だが、大中ノ湖南遺跡の例では、やや内凹みの鋤身にB型の着柄法がとられている。A型鋤にみるようなソケット状の構造は、柄差の手法がすでに唐古遺跡の前期に属する木製高杯にみられるので、前期にはあったと推定できる。B型鋤の構造は、より簡便で強靱な構造のものとして中期初めに考案されたといえるかもしれない。黒崎直氏の整理された表によって、各農具の多寡をみると、大中ノ湖南遺跡における農具の中、約半数は刃先の広い広鋤によって占められ、残りの約半分が丸鋤であって、残余が鋤類・又鋤類・狭鋤類である〔黒崎直「木製農具の性格と弥生社」、『会報動向』「考古学研究所」一六三〕。広鋤類が多いことは唐古遺跡や安満遺跡の前期でも、また池上遺跡の中期初めでも同じである。それは丸鋤のようなシロカキ用具の多いことも関係するのであろう。中期初めの鋤類のうち、比較的多いのはB型鋤であって、安満遺跡をはじめ池上遺跡・東大阪市瓜生堂遺跡（うりやど）に同様のものがあり、大中ノ湖南遺跡のものも含めるなら、これが畿内型の鋤とみてよいだろう。ただ着柄鋤と呼ばれる、鋤身が長くて身に二孔一對と上刃に突起をもつものは、長崎県里田原遺跡（さとば）から大中ノ湖南遺跡まであって、分布域が広い。瓜生堂遺跡の前期に属する一木造の長柄鋤は、身の中央に縦に隆起部があり、その特徴的な形態は三重県納所遺跡（なご）の着柄鋤の身と似ている。この中央の隆起部は土ばなれをよくし、かつ補強のためだとするなら、大中ノ湖南遺跡の着

柄鋤も同じ効果をもつところから同類としうる。この着柄鋤も中期初めに創出されたものとみてよからう。安満遺跡でスコップ形鋤と一緒に検出した中期初めの鍬身では、舟型隆起が刃部まで細くのびている。同様のものは他の遺跡にもあるから、中期には打込む力に耐えるよう鍬身の補強と土ばなれをよくする工夫がおこなわれたことがわかる。また広鍬の鍬身頭部に、「ゲタ」と呼ばれる突起が舟型隆起の逆面につくり出されている例が、大中ノ湖南遺跡や池上遺跡の中期初めにみられるのも、同じ補強の意図によるのであろう。木製農具が前期以来の製作技法を踏襲しながら、鋤や鍬の一部に改良のあとがみられることは、農業生産にかける比重が増大してきたことのあらわれともいえよう。

唐古遺跡の前期から中期初めの木工技術の練達ぶりは、一般的容器のみならず、A型鋤のように農耕具においても、その細部加工は鉄製工具によらなければ到底なし得ないと思われる。現実には鉄製の工具が入手

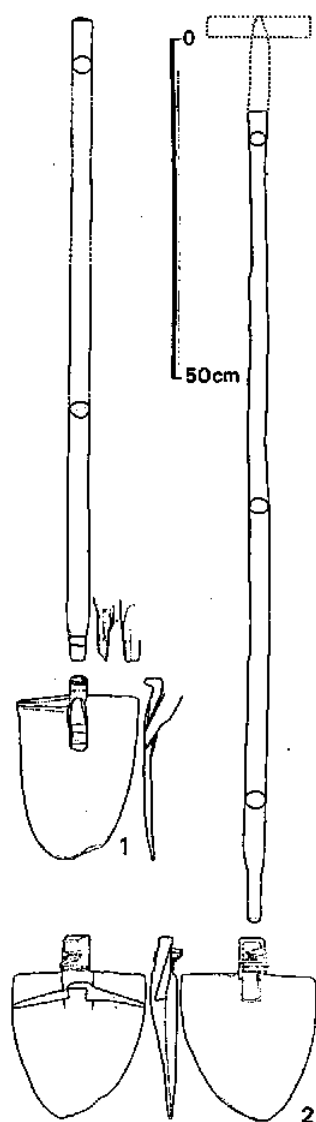


図85 スキ（安満遺跡）

し難く、ひいてはその使用が一部の人々に限定されていたとすれば、ムラの中での木器生産はなかば専従化の傾向を生むであろう。しかも安満のように木材供給の容易なムラと、そうでないムラとでは、自ら木製品に対する対応のしかたも異なつてこよう。例えば安満遺跡で大量な削屑がみいだされるのに、河内平野中央部の瓜生堂遺跡では未成品や製作工程を示すものがないことから、田代克己氏が指摘されるように、外部からの搬入とする見解も生ずる（『瓜生堂遺跡調査報告書』）。その場合木製品の交換を通じて、ムラ相互の間に緊密な経済的関係を生み、それはさらに政治的結合への道をとるであろう。

安満の木棺

地域間の交流を示す他の例として、コウヤマキ製の木棺がある。安満遺跡で一九六七（昭和四二）年に中期終りの二基の木棺——相当腐蝕して薄くなつていた——が検出された。その後一九七〇（昭和四五）年に同遺跡で遺存状態の良好な木棺一基が再び検出された。この遺存のよい例でみると底板は長さ二メートル余、幅六〇センチメートル余、厚さ一〇センチメートル余の厚板であつて、側板や小口板もそれぞれ同様な厚さの板からなつていた。他の腐蝕した二基も、本来このようなものであつたろう。三基ともその材はコウヤマキである。耐水性のあるところから、古墳時代の木棺もこの材を利用してゐるし、最近まで棺材や風呂桶の用材として使われてきた。そうした意味ではコウヤマキにみる選材の知識は弥生時代まで遡ることになる。ところで花粉分析の結果によると、安満遺跡やその周辺ではコウヤマキの花粉は全くといってよいほど検出されない。それに対し、大阪府中央部の瓜生堂遺跡では微少であり、もつと南の池上遺跡ではやや増加の傾向を示している。紀ノ川沿岸ならさらに増加しよう。この分析結果からみて、安満のムラの周辺にコウヤマキの事々たる樹林があつたとは考えられないから、棺材を入手するために

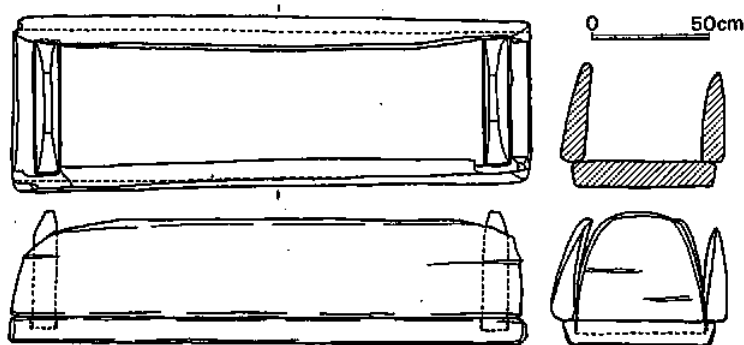


図86 木棺（実測図）（安満遺跡）

はわざわざ遠隔の地へ出さなければならなかったことになる。このことは、棺材を媒体として、大阪府南部や紀ノ川沿岸のムラとの交渉を余儀なくされることになり、棺材入手のための物資の搬出がおこなわれることになる。それを交易と呼ぶなら、北摂の壺や粘板岩・木製品のほかにも、織物やコメその他さまざまな物資が交換の対象となり得るであろう。そのためには交換に供しうるだけの、余分な物資の生産がおこなわれていたに違いない。

コウヤマキは高さ三〇〜四〇メートル、直径一メートルにもおよぶ樹形の極めて端正な常緑樹である。伐採した材を丸太のまま運んだか、板材にして運んだかは不明だが、棺を製作するのはムラでおこなわれたのであろう。髓を避けて、幅六〇センチメートルもある柁目の板をとるためには、かなりの巨木を伐り倒さねばならない。しかも石斧と楔で割るには相当の熟練を要する。それぞれ木目と直交するように六枚の厚板を組合わせるのに、釘は使っていない。長い底板の両端に近く幅一〇センチメートル、深さ五センチメートル、長さ五五〜五七センチメートルの溝状の柁孔を彫り、そこに木口板をたてる。板の表面や柁孔の仕上げにはヤ

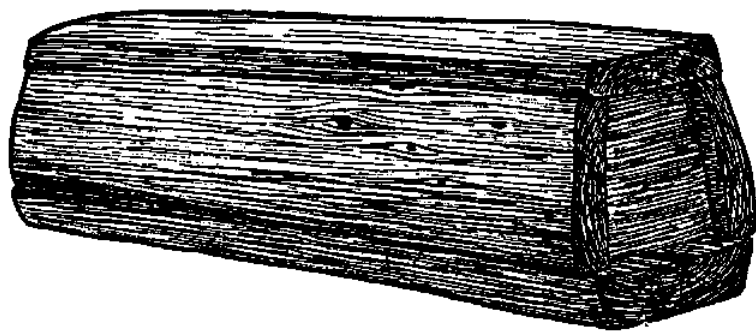


図87 木棺（復元図）（安満遺跡）

リガンナを用い、丹念に加工してある。側板の両端近くにも溝を彫り、木口板と組合うようになっている。この上に蓋板をのせると内法の長さ一・七メートル、幅五〇センチメートル、深さ四五センチメートルの空間となり、死者一人を収容できる。棺材の重さから推定して、こうした組合せ作業は埋葬時に現地でおこなわれたのであろう。その間死者がどのような扱いを受けていたかは全く明らかでない。木棺を納めた墓墳は棺を納めるに足るだけの、ぎりぎりの大きさであって、片側のみ側板と墓墳壁の間が一四〜一五センチメートルあいているにすぎない。棺がすえられる前、墓墳の底には薄く砂を敷き、その上に厚さ五センチメートル程粘土をおいて、墳底を平らにする作業がおこなわれた形跡がある。棺がすえられたあと、墳壁と棺との間に粘土をつめ、蓋の上も粘土で被覆した。死者にそえて、品物を入れたかどうか、何等遺存しないのでどちらともいえないが、多くの事例からみて副葬品を入れることはなかったように思われる。ただ安満遺跡の一例では、死者の頭辺と推定される位置に朱が付着していたから、当時すでに死者の埋葬にあたって、朱を頭辺におく風習のあったこと

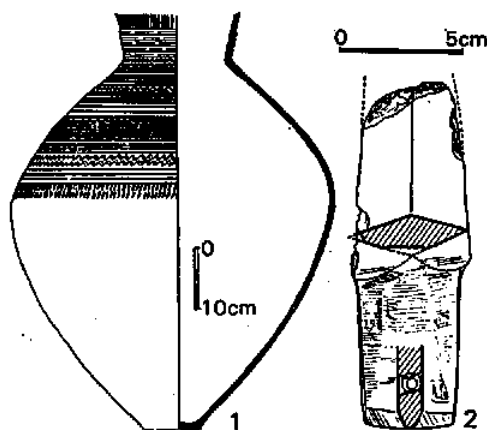


図88 壺棺と副葬した石剣（安満遺跡）

が知られる。同様に棺内に朱のあった例は、池田市宮ノ前遺跡の中期中頃の墓でもみられた。後の古墳時代前期の割竹形木棺内の同様な風習は弥生時代以来の伝統にあるといえる。こうした風習は弥生時代の北九州でもみられるから、当時広くあったものである。朱に防腐剤的な役割を期待したのかもしれない。

墓

こうした木棺がすべての死者に用意されたのではなかった。安満遺跡で検出した例によると、弥生時代中期の死者埋葬には木棺のほか、壺や甕を用いた例、単に土墳の中に納められたもの等、多様である。壺や甕に納めたものの中には、小児をいれたものや、

一度土葬したものを再度掘りおこして骨のみを壺や甕に納めた、いわゆる再葬墓と推定できるものがある。京大農場中央を南北に貫通する道路が、農場をぬけて国鉄線へさしかかる途中、その東側で、かつて中期終り頃の大壺を一個検出した。この壺の口頸部は打欠いてあり、その外側には磨製石剣一個がそえてあった。またそこから東へ約一〇〇メートルの東海道線暗渠部には、中期中頃の小さな壺類が埋めてあって、壺の底部近くには小孔を穿ってあった。小孔は、この壺が本来の実用性を失なっていることを示すと考えられる。また同様の壺は、この地点から西へ二〇〇メートルのところでも見つかった。その中間地点、つまりさ

きの道路の西側では、多数の土墳墓群が検出されている。してみると、中期のムラの北側は、中期中頃から終り頃にかけて、いたるところに墓がつくられていた感がある。しかし中期初め頃の墓は、もつと東の高垣町一帯にあった。ここでは一辺約五ないし約一〇メートル四方の、方形の盛土をした墓が群っており、盛土の下には一〇五基の埋葬施設がみつめられた。このように方形の溝をめぐらした墓を方形周溝墓と呼んでいる。こうした構造の墓は滋賀県南滋賀遺跡で検出され、その後兵庫県田能遺跡でも確認された。この種の墓が盛土を有することは安満遺跡で初めて確認されたが、その後封土の良好な遺存例が瓜生堂遺跡で検出され、従来明らかでなかった畿内の弥生時代の墓の資料は次第に増加しつつある。

方形周溝墓の構造的特色は、方形の封土を築くところにある。その築成は、まず盛土を薄く拡げながら順次上方へ積み重ね、ほぼ一メートル以上の高さにした。こうした墓には木棺による埋葬例が多いことをみると、封土の築成や木棺の製作に費される労力の莫大なことからして、方形周溝墓はムラの中の有力者の墓であることは誰しも肯定できよう。ただその場合、封土内に唯一基の棺や土墳を蔵するものと、数基の棺ないし土墳を蔵するものとある。安満遺跡の場合、木棺三基をもつもの（第四様式）や五基の土墳を有するもの（第二様式）があり、宮ノ前遺跡では七基の木棺（第三様式）を蔵していた。二基以上を蔵するものの中には成人用の大型木棺のみならず小児用の小型木棺もあり、宮ノ前遺跡では成人用木棺の短辺に近接して小児用木棺をおくなど、あたかも親と子の関係を暗示するかのような例が検出された。こうした例をみると、本来この種の墓は、家族のような血縁的に親密な関係にある人々の墓としてつくられたと推定される。さらに注意すべきことは、封土の周囲に幅一〇二メートルの溝がめぐらされ、墓域と外域とを画していることであ

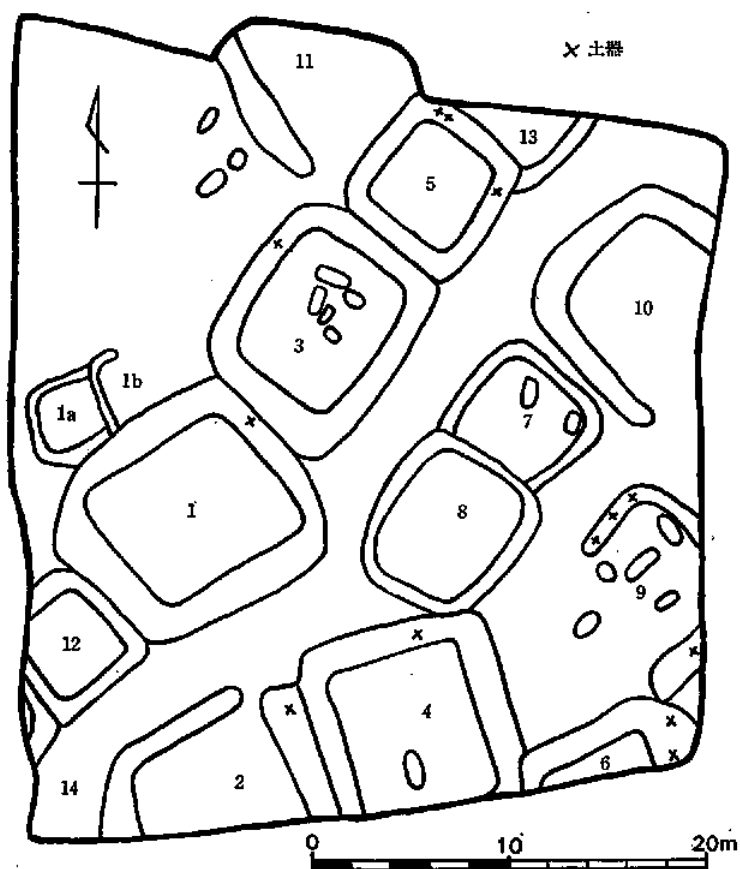


図89 方形周溝墓群 (安満道跡)

る。そして順次つくられる墓は、はじめの墓の周溝の一边を共有し、あたかも溝を連接共有することが同一血縁関係を標示しているようにみえる。安満遺跡東の高垣町では、東西約三五メートル、南北約四〇メートルの発掘地域の中に一四墓の方形周溝墓群が検出された〔大阪府教育委員会・高槻市教育委員会「安満遺跡発掘調査概要」〕。この地域の西南隅に前期の方形周溝墓かとみられるものが一基あり、その東北辺の溝に接して、一边五メートル四方の小さな方形周溝墓（二二号）があり、その東辺に接して一边一〇メートル前後の中期初めに属する方形周溝墓（二号）、さらにその東北辺に約七メートル四方の中期初めのもの（三三号）があり、五基の土壌を有している。この東北辺には一边約六メートルの中期初めから中頃のものの（五号）が接し、さらにそれよりやや規模の小さいもの（一二三号）がその東北辺に接し、それは中期中頃に属している。以上六墓の方形周溝墓は互いに溝を共有しながら、西南から東北へ連接している状況にあり、その年代も西南部が前期で、その東北端のものは中期中頃に属し、墓の造営が年代をおって、順次東北方へ連接されていったことがわかる。この調査区では、これらの南や北にも、同方向に併列する二〜三群の方形周溝墓群があり、その中には弥生時代後期の年代を有するものさえある。

いまここに示したような例は、宮ノ前遺跡・瓜生堂遺跡などでもみられるが、後者の場合は溝の一边を共有するのではなく、市松状の配置になっている点、やや趣きを異にする。前者では安満遺跡同様、溝を共有し二〜三基が一群となっている例がいくつも見られる。その場合、溝に供献された土器が多量にあって、興味ある現象——最初の墓に中期初めの土器のみがみられるのに、次の墓には中期初めや中頃の土器、ついでその隣りには中期初めから中頃・終り頃の土器が供献されているといった具合に、年代の推移に伴って造墓

築成が連続するとともに、奉祭供献の土器類も順次新しさを加えていく——が判明している。この現象については二様の解釈があり得るが、安満遺跡の例から推すと、順次築成していく間に、先に供献された土器の移動もあり得たことになる。もっとも宮ノ前遺跡の場合は付近に一〇棟の住居があり、そのうち時期の明らかでない三棟を除くと、中期初めの住居が一棟、中頃が四棟、中期終りの住居が二棟ある。墓の供献土器に中期終りの土器をもつものが数基あり、そのいずれもが先行する土器と共存し、かつ周溝墓の平面形が大きい傾向がある。全部で二一基ある方形周溝墓のうち、年代の手懸りのない三基を除き、供献土器の存否をもって埋葬祭祀がおこなわれたと認定し、時期毎に区分すると、中期初めが一〇基、中期中頃が一四基、中期終りが四基になる。合計数が全基数を上まわるのは、二時期以上にわたっているものを時期別に計算したからである。これによると、はじめ一〇基であったものが一四基に増加し、最後には四基に減少したことになる。たしかに中期中頃に周溝墓の数が増加することは住居の増減とも対応し、他の点からも指摘できる。例えば全二一基中、他と溝を共有しないのは一二基であって、そのほとんどは中期中頃に属している。このことは逆に、中期初めに成立した墓はその後つくられる場合、溝を共有するように接続してつくられていく傾向があるということであって、さきに安満遺跡でみた傾向と一致する。しかし宮ノ前遺跡では、中期中頃に分離独立して成立する方形周溝墓が多くみられ、それらの規模は中期終りの供献土器をもつものに比べると、それほど大きくはない。一〇棟の住居に二一基の墓が単純に対応するのではない。例えば、近接しかつ時期的な建替のたどれる一号・二号・三号の住居は、三号が中期初め、二号が中頃、一号が終りに属する。このように組合うものがある半面、中期中頃の他の三棟に同一地点での建替を時期的に示すことは難しい。

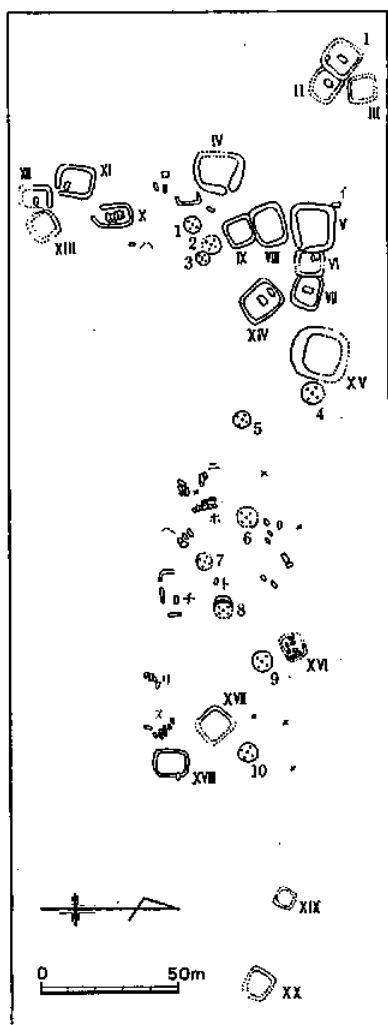


図90 宮之前遺跡の住居と墓
(1～XX方形周溝墓, イ～ス土城墓,
1～10壑穴住居)

この住居のあり方は、さきに墓でみた中期中頃の傾向と対応する現象である。どの墓にどの住居が結びつくかを指摘することは容易でない。けれども、いまここに示した住居と墓それぞれに共通してみられる中期中頃の傾向は、当時住居を分離させるような状況がムラの中におこったこと、それにつれて、墓の造営も新たに独立的になされるようになったことを物語っている。それと一方では同一地点に次々に住居の建替をおこない、墓も溝を共有させて接続してゆくものもあつたのである。こうしたムラの中で二つのありようは、中期初めにすでに萌芽していたのであろう。しかも中期終りになって住居数が減少し、しかも墓は新立されず従前の墓を襲用するとともに、それが接続されたもののみみられるということは、まことに興味ある現象である。

これに対する一つの解釈として、次のようなムラの動向を推測できよう。中期初めに成立したこのムラは、主核的な数棟のイエがそれぞれ墓をつくり、やがて中頃にはあたかも分家するのと似て、イエが分離独立する。独立した各イエもまたそれぞれ墓をつくり始めた。しかし中期の終りには本家の墓のみに集約されていった。中期終りのこの変化は、やがて後期にこのムラが廃絶するように、新しい政治的動きによって、ムラから離れてゆく人々が増加したからであらうと。この新しい政治的動きについては、さらに弥生時代後期のところで述べることにしよう。

話を安満遺跡にかえそう。東の高垣町の方形周溝墓は累世的に継続してつくられるタイプの墓であった。一方、西の八丁畷町ではやく検出した方形周溝墓は単独につくられるタイプの墓に属しよう。溝を共有する継統型の方形周溝墓は市内川西遺跡にもある。その中の一基には、封土の裾に局部的に石を積みあげた例が見つかっている。いったい、弥生時代は土木技術史の上からみると、盛んに溝を掘るようになった時代であるが、石をつかった構造物は全くといってよいほどみられない。それはむしろつぎの古墳時代以降に盛んになる。どうして墓の裾に局部的に石を積んだのか、その石組の意味は明らかでない。このほか中期の方形周溝墓は市内天神山遺跡にもある。茨木市の東奈良遺跡でも方形周溝墓が、阪急南茨木駅の南側一帯で検出され、府下のみならず近畿から東日本一帯でも、盛んに報告されるようになってきている。方形周溝墓と住居との関係を見ると、方形周溝墓のあるところはムラはずれであることがわかる。安満遺跡で、中期のムラが拡大する現象がみられるけれども、墓地がムラの東西に二〇〇メートル以上も離れて形成されるというのは、ムラの拡大現象の中に、二極構造を生ずるようになったとみてよからう。それはのちの後期のムラにも

ひきつがれる。

方形周溝墓の域内に成人や小児の木棺が埋葬されているのに、その域外に成人や小児の土壙や甕棺・壺棺が単独に、あるいは群集していることも注意にのぼる。安満遺跡や宮ノ前遺跡で、周溝の外辺近傍に単一の土壙がつくられている例がある。それはおそらく周溝墓内の被葬者たちと親縁な関係にあるのであろう。しかし、周溝内に埋葬されないのは、その被葬者が周溝内の人々と区別される状況にあったためと考えられる。また土壙のみが一個所に集中し、一〇基も壟集した例がある。しかも土壙内に土器の副葬があるところを見ると、当該被葬者群が方形周溝墓の被葬者より埋葬の形態が簡略化されており、しかも単独の埋葬でもないところに、その特徴がみられる。瓜生堂遺跡では多数の土城墓群が、溝を界して方形周溝墓群と墓域を異にしている事実が知られている。弥生時代中期に、墓域を異にするグループのあることや、墓の造営に格差のあることは、明らかに階層的格差をムラの内部に生じていた結果とみてよいだろう。

このような同一墓域における墓の構造や埋葬地の差が、瓜生堂遺跡や宮ノ前遺跡・安満遺跡など中期の墓地で画然とした差異を呈しはじめていることは、弥生時代中期に、すでにムラ内部に生前区別される状況が生じていた証拠であろう。周溝墓を築くことと、土壙墓を築くことの差は、死者を収納する容器が前者には木棺が、後者には薦（いす）やアンペラのようなもつと手軽なものをあてたと推定されること、また供献される土器類は前者が多く、後者には少ないことにもあらわれているといえよう。こうした差が前期（新）段階にすでに萌芽していた例として、池上遺跡や安満遺跡をひきあいに出すとしても、それがただちにムラ内部の擲取者と被擲取者のような階級関係を示しているとは考えられない。むしろ前期（新）段階に出現した墓地にお

ける差異は、なお類例の僅少なことも含めて、そこに成立した差がムラの中でおこりつつあった身分上の差、ないしは本家と分家にたとえ得るような差を表明しているとみるべきであろう。それは一面で方形周溝墓でさえ、土墳墓を主体とし、かつ副葬品の絶無に近いことが畿内弥生時代の方形周溝墓の特徴といえるからである。

天神山遺跡

安満遺跡の中期初めのムラが、前期のムラを踏襲したであろうことはさきにも述べた。しか

の成立

しその間には松尾川の大洪水がおこり、従前のムラは一時土砂の下に埋没した。これは瓜生堂遺跡その他河内平野の諸遺跡の、花粉分析や土砂の堆積状況の観察によって推定されたように、縄文晩期以降におこった温暖——湿润——多雨現象に伴う気候変化や海面上昇とも関係があるのである。だがむしろ、これを基盤としてひきおこされた河川堆積の激化や河口閉塞による湖沼の出現をはじめとする、河川流域におこる局地的な地貌の変化こそ、そこに生存する弥生人に深刻な変革をもたらすことになったのである。土砂の下に深く埋もれてしまった耕地を再び取戻すことは容易でなかったと思われる。安満遺跡では、確かにかつてムラのあった地域に再び水路を掘り、その岸に杭を打ち、しがらみをとる工事がおこなわれたし、住居が営まれたことが知られている。その住居がどのようなものであったかは明らかにできないけれども、掘立柱穴群が約一〇メートルの間隔をおいて密集し、なかには柱穴の基底部に厚板をすえ、柱の沈下を防ぐ礎板とした例すらある。これらを見ると、砂礫層の上に再びムラを構えた人々のたくましさを想う一方、そうせざるを得なかった人々と、そうでなかった人々とがあったことが想定されよう。これはあたかも第二次大戦末期に都市が焼土と化した際、いちやく焼野原へ復帰した者と、疎開地に拠を求めた者のあつ

I 考古学からみた原始・古代の高槻

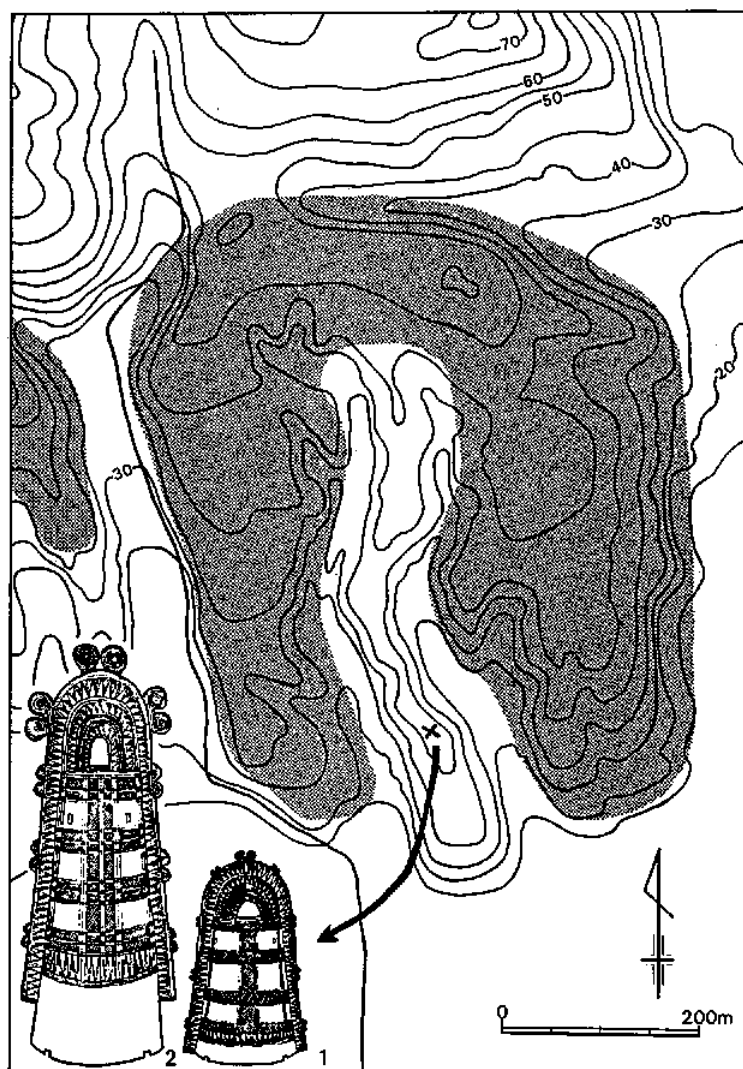


図91 天神山遺跡（1天神山跡，2伝清水村跡）

たのと似ている。

洪水によって耕地や住居を失ったとき、ムラのありかたには、元にかえしようもないほどの大きな断絶がおこったであらう。季節的な集中豪雨でさえしばしば流路を変えやすい桧尾川の分流は、常に自己堆積によって河床を高くしつつあったし、その管理は彼等弥生人にとって、手にあまるものがあつたらう。いまや、洪水によって荒地と化した旧水田を回復するよりも、より危険性の少ない、耕地化しやすい土地を求めて、移動せざるを得なかったグループが出現したとしても不思議はない。しかしあらためて、ムラからいくばくかの人口が分離することを考えてみると、それはさほど簡単なことではなかったように思われる。

安満遺跡の西方約一キロメートルの、小高い丘のうえに、中期初めから始まる天神山遺跡がある。ムラが分立するにはさまざまな要因があつたであらうし、その要因のことごとくについて詳細に知ることとはできない。しかし民族調査の事例にしがたえば、ムラびとの一部の分離は、母村の労働力の減少を招くことであつて、稼働労働力の急激な低下を容認し得ない状況下で人口の分離をおこなえるはずはない。そのような状況下では、むしろムラを出ることを抑制する力が強く働くであらう。また分出した人々にとつても、母村の支援なしには新しい耕地の開拓は困難であらうから、相互に友好的関係を維持する保証なしには分出しがたい。しかも新天地は、従来母村が確立してきた領域の中でのみ、安全に存立しうるであらうから、一言で分村といつても、容易ならざる問題を克服してこそ達成し得るものであつたと考えるべきであらう。このことは、やがて新立のムラが母村の近傍に成立し、「連続地域」ごとに祖先を同じうする人々が集まる傾向を生じた。もし、この母村と新たな分枝集団とを「氏族」と呼ぶなら、弥生時代中期の社会関係は、このような

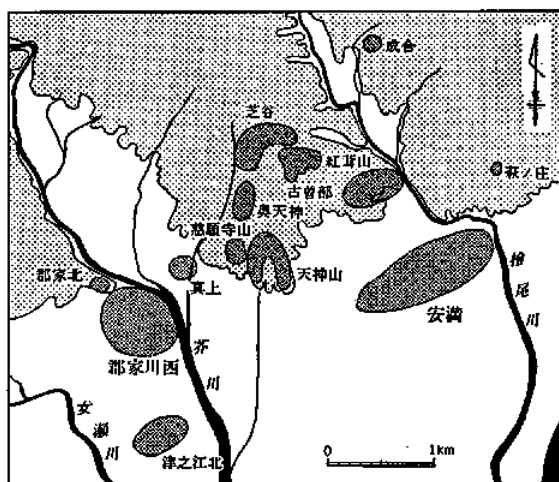


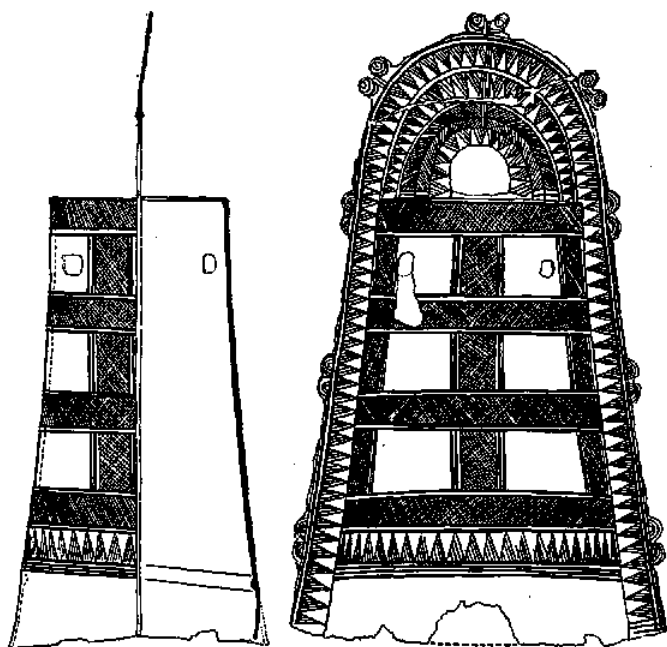
図92 中期・後期のムラの分布

地域的近距離にいくつかの集団が群った状態を、現出させていく段階だったといえよう。

天神山のムラは安満のムラに大洪水が見舞うまでに、すでに分村していたのかもしれない。そして大洪水は丘の上のムラへの移住を促進したのであろう。天神山の遺跡が、三つに枝分れする尾根のつけ根を中心に展開し、尾根の間の狭い谷間を耕地化したと推定するのは、他の遺跡の例からみても妥当である。だが後には耕地化の指向は、谷口より南へひろがる平地にも及んだであろうし、丘の傾斜面を利用したアワなどの畑作物の栽培も、併せおこなわれたであろう。そう推定されるのは、この北約二〇〇メートルのところに中期末成立した芝谷遺跡では、アワが壺の底に多量に遺存していたからである。

天神山の丘上のムラが中期初めに出現する状況をこのようにみると、このムラの形成の背後には、自然の要因がかなり大きな比重をもったのしかかってきているように解される。もしそうだとしたら、中期末から後期における分村は、いささか事情を異にしていたのではなかったか。天神山遺跡の北の奥天神町やその北に位置する芝谷遺跡、その東尾根の古曾部遺跡や成合の谷奥にある成

0 20cm



跡の銅鐃 (実測図)

合遺跡等は、みな中期の遺跡である。そして桧尾川の平地への出口に臨む紅葺山遺跡は後期に、安満のムラを見おろせる萩ノ庄遺跡は中期末から後期に属する。これらの諸遺跡が、まるで安満のムラをとりまくように周辺の丘上に位置するのはどういふことなのか。中期初めにすでに成立する川西遺跡や、後期の津ノ江北遺跡など、依然平地にあるムラのことも含めて、のちほどこの問題を考えてみたいと思う。

銅 鐸

天神山遺跡のある三つの尾根のうち、中央の尾根上から、戦後一個の銅鐸が見つかった。現在、この銅鐸は東京大学教養学部に所蔵されている。出土したときの状態は明らかでないが、損傷や緑青の状況から、損傷のある面を上にして埋めてあったと推定される。この銅鐸があった付近には、土器片や住居跡などはなかったらしい。天神山遺跡には、銅鐸がもう一個埋められていたらしい。それ

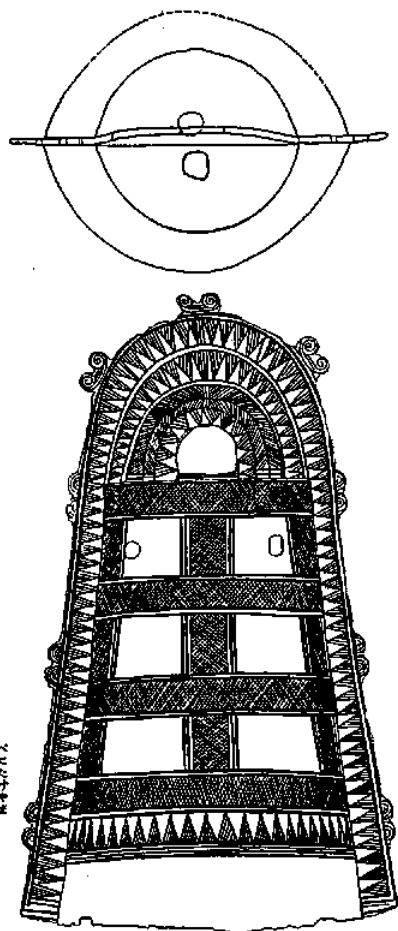


図93 天神山遺

は江戸時代正徳年間（一七一〇—一七二六）に、松の根を掘っているときに見つかったもので、かつて梅原末治氏が「伝清水村出土の銅鐸」とされたものが、それにあたるものであろう。この伝清水村出土の銅鐸は、佐原真氏の教示によると、現在ロスアンゼルス美術館にあるという。これら二つの銅鐸は一つは中の尾根に、他は東の尾根に埋納されていたのかもしれない。しかしどうして天神山の尾根に銅鐸が埋納されたのであろうか。それには銅鐸の概略を予めみておく方がよからう

銅鐸は、銅と錫を主とする合金でつくられている。そして筒形的身と、その上方につりさげるための釣手（紐という）をそなえ、身の両側には薄い鱗（うろこ）がついている。ときには舌（ゼツ）をもつものがあり、その内側下縁の凸帯や釣手に磨耗痕のあることから、この器物がゆり動かし音を発する機能をもっていることがわかる。この祖形にあたる器物は朝鮮や中国にある。しかし銅鐸は、はじめから装飾的な文様——ふつう流水文や装束文と呼ばれる——で飾られている。多様な銅鐸の分類は、これまでいろいろな案が示されたが、器物

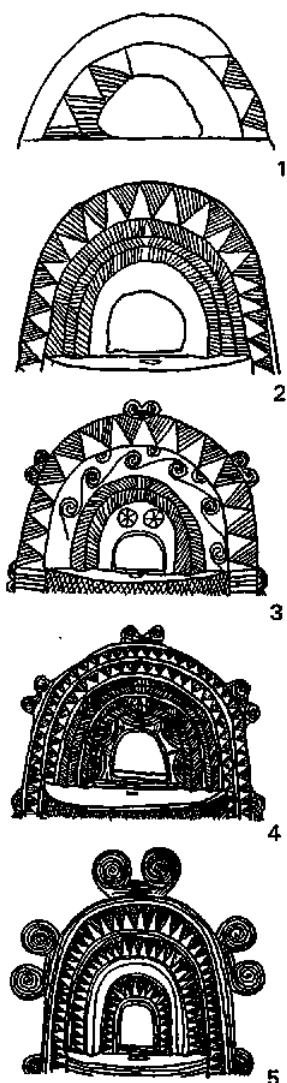
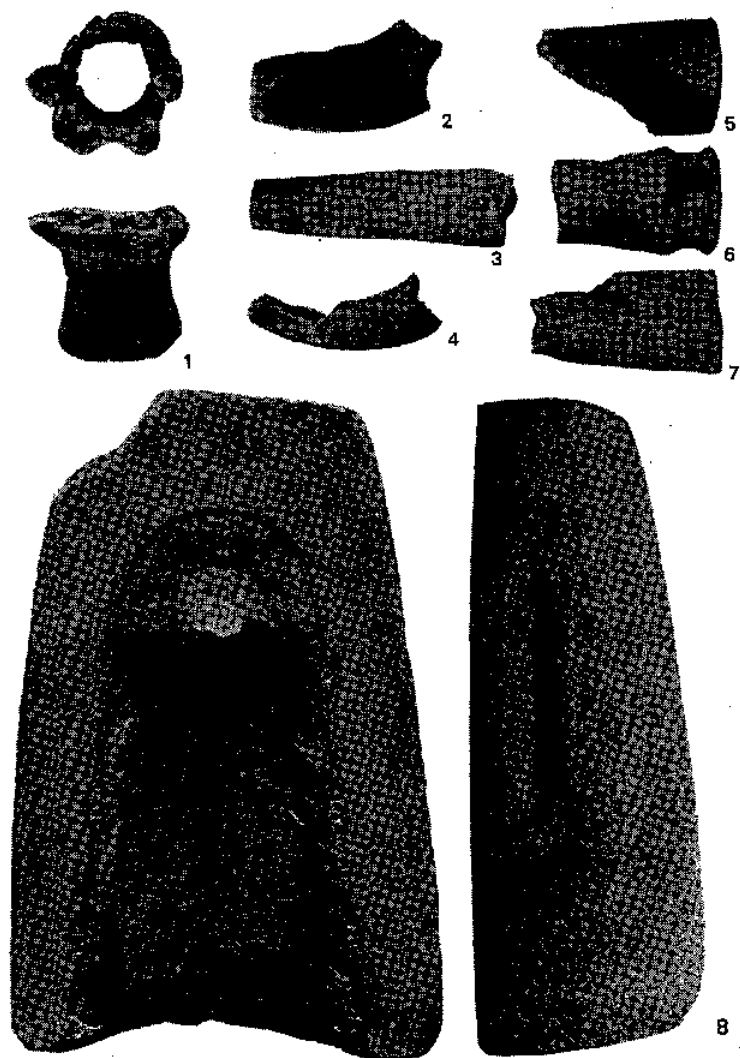


図94 銅鐸の鈕の変遷（1菱
環鈕式、2外縁付鈕式、3
扁平鈕式、4・5突縁鈕式）

Ⅰ 考古学からみた原始・古代の高機



写19 ガラス勾玉の鋳型(1)・フイゴぐち(2~7)・銅鐸の鋳型(8) (東奈良遺跡調査会提供)

本来の機能を前提とする分類が最も説得力がある。この分類案はかつて喜田貞吉氏が試み、最近佐原真氏によつてすぐれた見解が示されるにいたつた〔佐原真「銅鐸の製造」¹。氏の分類案は鈕の形態・裝飾を基準として四段階に分かつたもので、断面菱形の半環状をなす鈕をそなえた菱環鈕式（最古の銅鐸）・菱環の外側に扁平な外縁をつけ加えた外縁付鈕式（古い銅鐸）・外縁のほか菱環の内側にも扁平な内縁をもつ扁平鈕式（中頃の銅鐸）・鈕外周および文様帯界線に突線をつかつた突線鈕式（新しい銅鐸）とに大別し、この順序で変遷したとされている。菱環鈕式と外縁付鈕式はそれぞれさらに二つに分かれたれ、突線鈕式は五つに細分される。銅鐸が見つかっている地域は、西は島根・広島・香川・高知の各県、東は石川・長野・静岡の各県にわたる範囲である。このように広範に分布する結果、地域的特色をもつものがあらわれる。三河・遠江地方を中心にひるがる三遠式銅鐸、これと対照的な近畿式銅鐸が類別され、後者についてはさらに細かくA・B・C（袈裟文の縦帯と横帯の交叉の仕方による区分）とⅠ～Ⅳ（施文上の軸突線の用法による区分）の組合わせで、一層細かに分類されている。この分類案にしたがえば、天神山出土の東大蔵の銅鐸は「突線鈕二式・近畿ⅠA式銅鐸」で、ロスアンゼルス美術館蔵のは「突線鈕四式・近畿ⅢC式銅鐸」に類別される。

銅鐸がつくられた年代については、いろいろな見解があつて一致していないが、銅鐸を飾る文様と土器の文様との対比から、佐原氏は外縁付鈕式鐸の製作年代を弥生時代中期初頭と考え、それに先行する菱環鈕式鐸を前期後半と推定している。一方、製作年代の下限になると、弥生時代のなかで終つたと考える説と、古墳時代にまで及ぶとする説があり、前者の説でもいろいろな違いがある。そのうち、中期末の土器に描かれた線画と、扁平鈕式から突線鈕式前半の銅鐸にみられる線画を対応させ、これより以後の銅鐸を後期とする

案がある。

最近、茨木市東奈良遺跡から外縁付鈕式鐸や扁平鈕式鐸の銑型・大阪湾型と呼ばれる銅戈の銑型などが見つかった。銅鐸の銑型は砂岩製であり、銅戈の銑型は粘土製であった。銅戈の銑型は質や削り具合からみて、同層にあった多数の第四様式の弥生土器に似ている。しかも神戸市桜ヶ丘では、大阪湾型銅戈と多数の扁平鈕式鐸が共存した。この点から、扁平鈕式鐸を第四様式のあたりに推定することができる。

銅鐸の飾耳

銅鐸の鑄は、型合わせの隙間に生じた甲張りが裝飾化したものだといわれている。鑄には飾耳がついている。飾耳は本来、銑型から製品をとりはずすときの「かかり」としてつけられたものであった。銅鐸では鐸身上部が最もとりはずしにくい部位だったため、この部分に半環状の二個連結した突起がつけられた（外縁付鈕式鐸）が、本来「かかり」の半環状頭部は仕上げに際して切りとってしまふものであったらしい。しかし、のちには鐸身の長大化に伴って、それが左右三箇所づつにつけられ、さらに半環状の脚部は鑄を横断して、鐸身に達するようになる。しかも、その四本の脚はやがて形式化し、単に四本の突線をもって示すにすぎなくなった（扁平鈕式鐸）。そして最後には突線鈕式鐸にみられるように、半環状かかりの頭部曲線は鑄の輪郭線外に残り、脚部は鑄を横断する突線に化し、分断されることになった。突線鈕式鐸の飾耳が輪郭線外に突出し、全く鈕の双頭渦文と同じように裝飾化していることは、本来の「かかり」としての機能を失ってしまったからである。銅鐸の祖形とも考えられる朝鮮の小銅鐸は、型持せの位置はやや異なるが石製の銑型であった。そしてわが国の銅鐸についても、東奈良遺跡から外縁付鈕式鐸や扁平鈕式鐸の石型が検出され、そのうち二号銑型で銑造した二個の銅鐸がわかっている。この事例から推せば、

同範鐸（同じ鑄型＝鑄范^{ちゅうはん}）からつくった銅鐸について、石製の鑄型を使った可能性が高い。ただし、同範鐸で最大のものは高さ四六センチメートル（伝尾張Ⅳ）であって五〇センチメートルを超えるものは現在のところない。

ところで（１）新しい段階の銅鐸である突線鈕式鐸には同範鐸がない。（２）突線鈕式鐸各式で高さが最大のものをとってみると（単位センチメートル）、（一式）六〇、（二式）八七・八、（三式）九八、（四式）一二八、（五式）一三四・六というように、次第に大型化していくことがわかる。扁平鈕式鐸の最大のものの（兵庫桜ヶ丘六号、高さ六四・二センチメートル）に比べると突線鈕式鐸は二倍以上の高さになっている。（３）しかも「かかり」が実際の意味を失って裝飾化してしまっている。以上三つのことは、鑄型が石型でなく、砂型を使うようになったことと関係があると考えられる。つまり、銅鐸を大きくしようとするとき、石型では切出し得る石材（素材となる砂岩はわれやすい）に限界があった。そこで技術的革新として砂型が考案された。それは従来経験すみの内型の製法を外型に適用することであった。しかしそれは、鑄造後破碎して製品をとりだすという内型の性質をも伴っていた。大きな重い鑄型を合わせ、倒立させて裾部から溶銅を注ぐには鑄型を固定する方法は大じかけにせざるを得ない。しかも、鑄造後この鑄型から製品をとり出すには、鑄型の外

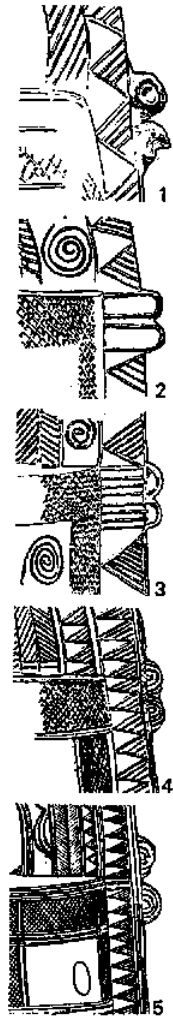


図95 銅鐸の飾
耳の変遷 (1)外
縁付鈕式 2・3
扁平鈕式 4・5
突線鈕式)

型を破砕せざるを得なかったのであろう。唯一回限りの鋳型となったとき、「かかり」の意味は失われ、単なる痕跡器官^{アト}となつて装飾化してしまつた。砂型技法によるかぎり、同範の銅鐸はあらわれようがない。

石型の限界を克服したことによつて、鋳造用の大きな石材の入手について考慮する必要はなくなつた。その代り、同一の鋳型からいくつも鋳造することはできなくなつた。むしろ、鋳型を保持するための、筋張りの技術や真土^{マツ}の製法が重要になつた。それとともに湯まわりをよくする工夫も必要であつた。この変化は「石型銅鐸」から「土型銅鐸」への変化であつたし、「同範銅鐸」から「単一銅鐸」への変化でもあつた。

銅鐸を大略新古にわけるとき、製作技法の点から石型技法による銅鐸を「古式の銅鐸」、砂型技法による銅鐸を「新式の銅鐸」と呼び分けるとすれば、菱環鈕式鐸と外縁付鈕式鐸は「古式」、突線鈕式鐸は「新式」である。しかし、扁平鈕式と呼ばれるもののなかには、石型によるものもあれば、砂型によるものもあるから、扁平鈕式鐸は新古に両分されることになる。このことは、砂型技法が扁平鈕式鐸からはじまつたことを意味する。

銅鐸の高 現在、銅鐸は三六〇個余が総数としてあげられている。そのうち、高さと重さのわかる三〇個について、型式別に相互の関係を示すと図九六のようになる。新しい型式になるほど、傾きが太になるのは、「同量の素材で、より大きくつくられるようになった」と解釈できる。しかし、菱環鈕式鐸から扁平鈕式鐸までの変化と、その後の突線鈕式鐸とを比べると、傾きに格段の差がある。これは砂型技法を採用したからである。扁平鈕式鐸までは石型技法に工夫を加え、より見映えのする大きさを生むために内型の削り方に進歩があつたらしく、薄い銅鐸をつくる努力が重ねられたらしい。しかし、いまや砂型技

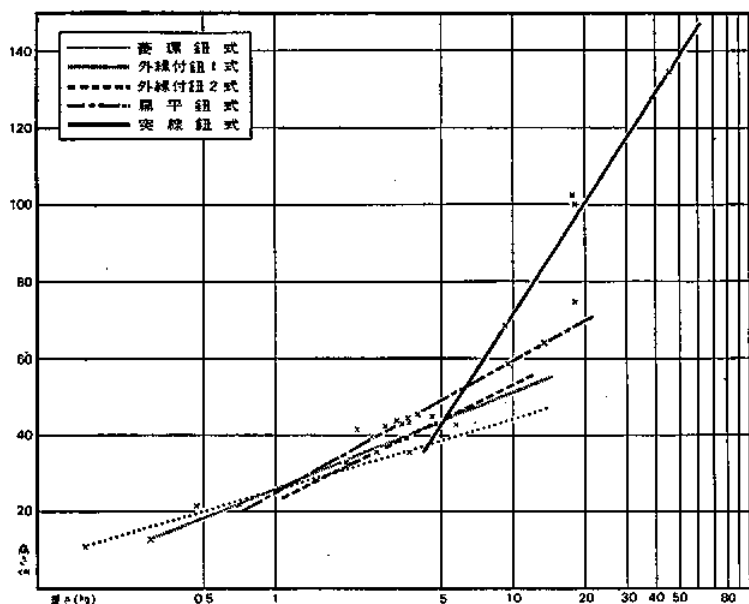


図96 型式別にみた銅鐸の変遷 (高さ・重さ)

法の採用は、みごとにその願望をかなえてくれた。銅鐸は以後、加速度的にその大きさを増した。二つの技法の境界は、グラフの交点でみるように、高さで五六センチメートル、重さで六・四キログラムがその分岐点であったようだ。

さて、このグラフをつかって、高さと型式の判る二四四個の銅鐸について、銅鐸の重さを推定し、各型式ごとに(一)高さの平均値、(二)重さの平均値、(三)総重量、(四)個体数の変化を比べてみよう(図九七)。個体数では扁平鈕式鐸がピークを示し、その後突線鈕一式鐸で激減し、再び増加するがやがて減少していく。この傾向は、高さ不明のため除外したものを加えてもあまり変らない。それなのに高さ・重さは突線鈕一式鐸以後急

Ⅰ 考古学からみた原始・古代の高槻

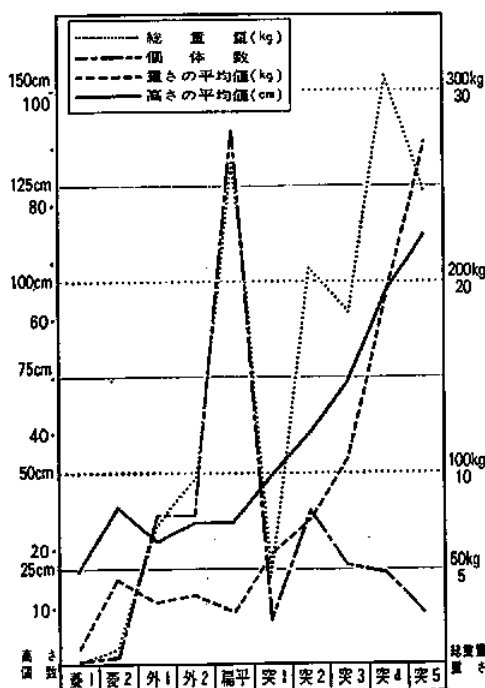


図97 型式別にみた銅鐸の変遷 (総重量・個体数・重さの平均値・高さの平均値)

速に増大する。扁平鈕式鐸で軽くなるのは、この段階に新式技法によるものを含むからであろう。以上三つのグラフの傾きと総重量の変化を比べてみると、各型式における銅鐸生産のあり方がうかがえる。扁平鈕式鐸以前と突線鈕一式鐸以後には大きな違いがある。総重量の変化を銅鐸生産に費した素材の供給・消費量の変化とみるなら、突線鈕一式鐸の激減は、銅鐸の生産が著しく低下したことを示していることになる。この生産の低下をひきおこした要因は何であつたろうか。しかも、この段階の前と後とは銅鐸のつくり方についてはその性格が大きく変っている。こうした変化を結果づけたのは、一世紀中頃の倭国大乱であつたと推定

し、この大乱は銅鐸の生産を一時衰微させ、その後に、銅鐸の風性を視覚的に一層見映えのするものへ変えてしまったと解する。かつて、中期初頭の大洪水後にはじまった石型技法による銅鐸づくりは、扁平鈕式鐸の段階に生産量のピークをつかった。この段階には古式の石型技法は極限まで改良・工夫が加えられ、しかも新式の石型技法が登場した。その後戦乱に

よって銅鐸生産は一時衰微したが、再びつくられはじめた新しい銅鐸は、突線鈕四式鐸の段階には総重量で最高のピークに達した。天神山の銅鐸はいずれも大乱後つくられた銅鐸である。そのうち突線鈕四式鐸は、ヒミコの死後に入手したのであろう。最も新しい銅鐸は三世紀の終りに近いころつくられ、まもなく近江で埋納された。そこには銅鐸祭祀を保守的につづける地域と、新しい体制に再編成されはじめた地域の差が考えられる。三世紀中頃から四世紀にかかる時期——それはまさに邪馬台国の時代にあたる——は先進地域では銅鐸の古い祭祀を放棄していった時期であり、まもなく新しい古墳の時代を迎えようとする時期でもあった。天神山の銅鐸もその時期に埋め、忘れられていったのであろう。

剣

安満の前期(新)の土器といっしょに見つかった木製の剣は、身と柄を一本でつくりあげたもので、長さ約六〇センチメートルもある。ほぼ半分の長さのある柄の端(剣首)を削り出

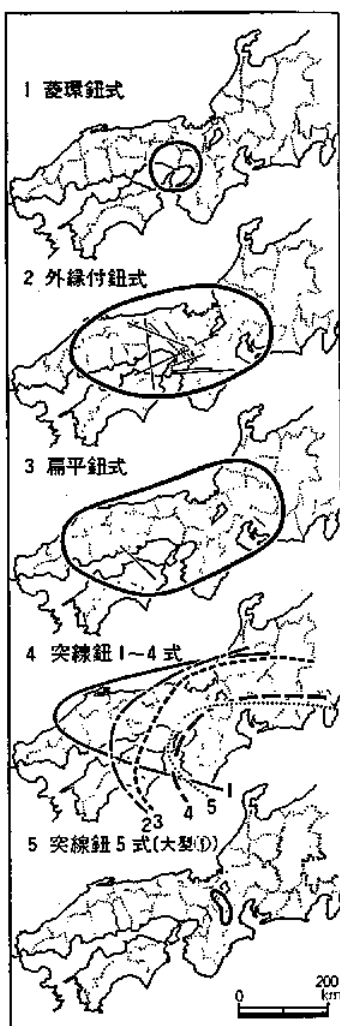


図98 型式別にみた銅鐸の分布

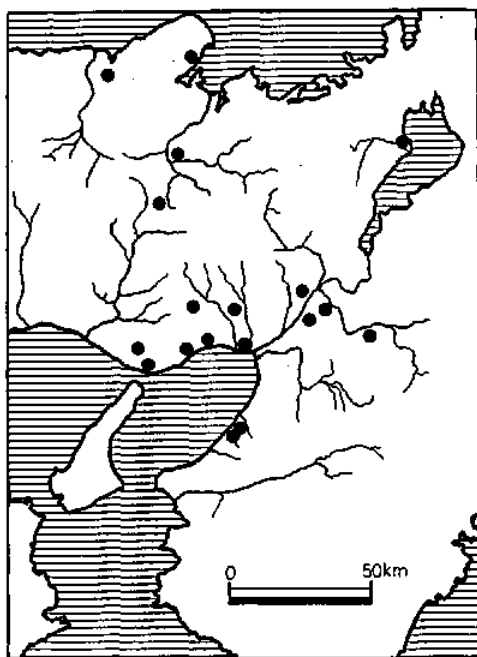


図99 銅剣形石剣の分布

し、断面稜形の身の基部近くには刳り込みがある。細形銅剣をまねてつくったのであろう。その祖形は北九州や朝鮮にたどれる。それは族長の身辺を飾るものであったし、彼の死とともに、墓の中に副えられた。北九州ではそうした例がいくつも見つかっている。安満の木剣もおそらく青銅製の剣と同じように族長の身辺を飾ったのかもしれない。木剣の検出例は奈良県唐古遺跡にもある。

中期になると、銅剣を粘板岩で模したものがつくられた。天神山遺跡の二例は破片だが、剣の血ながしの樋までついている。銅剣形石剣は、その分布が大阪湾沿岸や淀川・木津川流域、北は琵琶湖西岸や丹後半島にいたる近畿北部にひろがっている。加古川・由良川流域にもあって、佐原氏が指摘するように、あたかも弥生時代の主要交通路を示している観がある〔史1〕。また、宮津市日置遺跡や神戸市垂水遺跡で石剣のみ単独に出土したのは、祭器としてあつかわれたと推定されている。この時期、瀬戸内中部を中心に、剣の形を誇大化した剣型祭器が発達する。それは香川・愛媛の瀬戸内海沿岸に濃密に分布し、九州東岸にも及んでいるが、瀬戸内

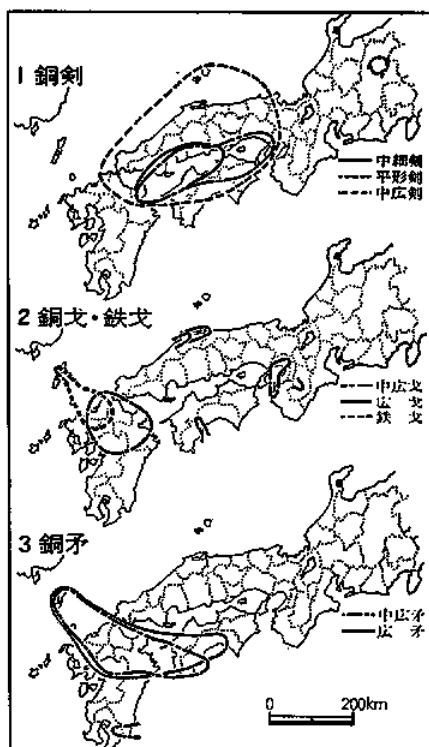


図100 銅剣・銅戈・鉄戈・銅矛の分布

海を舞台に活躍した内海航海者たちの祭祀具であり、その活躍がいかにかに活潑であったかを示している。大阪湾沿岸域と北九州といった、内海の東西二つの地域の間にあつて、海上交易に従事し、阿地域を結びつける役割を果たしたのであろう。そうした意味では、内海航路の航行権をにぎり、航行の安寧を祈るため、「海の祭祀」ともいうべき祭りに剣型祭器を奉祀したのであろう。彼等は瀬戸内をのぞむ高所にも集落をつくつた。香川県三崎半島にある紫雲出遺跡は標高三四四メートルの高所にあつて、眺望がきく。これを防禦的・軍事的性格をおびた遺跡と解し、その傍証に石鏃の大型化を指摘する見解もある〔小林行雄・佐原真「紫雲出」香川県三崎郡三崎町文化財保護委員会〕。だが、全中期一四〇年間を通じて集落が営まれた理由は、むしろ内海を舞台に生きた海上の人々が、交易や

漁撈に依存していたことと密接な関係をもっていたとみる方が真に近いのではあるまいか。

瀬戸内中部が銅鐸の分布圏にも含まれるのは、この地の人々が、畿内型の農耕祭祀をうけとつたことを示すのであろう。東の畿内地方と密接な関係のうえに、この地域、とくに四国北岸域が発展したことは、石器や土

器の点でも指摘できる。その対岸、吉備とは対照的でさえある。一方、形こそ矛型だが、同じような武器型祭器をもつ地域が西にあった。四国西南部から北九州・対馬にかけてひろがるこの祭器は、対馬に異常に集中するところから、外洋航海者たちの祭器と推定されている。いまとりあげた二つの武器型祭器は、一つは内海航海者たちの、一つは外洋航海者たちの活躍を示している。そしてこの両者と銅鐸を祭器とする地域との密なる連繫こそが、西日本の弥生文化を育み、東日本への農耕文化の躍進をささえた力であった。

簾状文と 中国の史書『後漢書』によれば、建武中元二（西暦五七年）年、倭の奴国の使者が朝貢し、光武**突帯文** 帝から印綬を授けられたことがみえる。これが博多湾にのぞむ志賀島から、天明四（一七八四）年に発見された金印にあたることは、よく知られている。奴国王が金印をもらい、漢帝国の政治圏の中に含まれた時期は、北九州では洗練された須玖式土器の段階であった。その同じころ、畿内でもまた、櫛描文様の最盛期にあった。中河内の生駒山麓や南河内のムラむらでは、独特な文様をつけた土器がつくられた。土器を飾る簾状文は、中・南河内から大和にかけて、一つの有機的な関係をもった世界をつくっていたことを示している。

そのころこの三島では、対岸の北河内・山城南部とともに、壺の頸部に断面三角形の突帯をめぐらしていた。この突帯文の装飾は、西方の山陽・山陰に広くひろがり、また、南方の紀伊にもおよんでいる。淀川や瀬戸内を通じて、広く東西につながっているこのあり方から、そこにも有機的につながった世界を想定できる。しかもこれらの地域の動向は、倭国大乱後の新しい世紀で、極めて重要な役割を果たすことになる。

第三節 古墳出現への胎動

芝谷遺跡

市立図書館のあるあたりは、弥生時代中期初めに成立したムラの墓があった。現在は住宅になってしまったけれども、かつては細い尾根道が北へつづいていた。奥天神町から日吉台へ行く道路が名神高速道路を北へ渡った、すぐ左手の丘（標高一〇二メートル）の上で、円形や方形の平面形をもった堅穴住居が三三基見つかっている〔高槻市教育委員会『芝谷遺跡発掘調査資料』〕。丘の上の狭い平地は、南北二〇〇メートル、東西は最も広いところで約五〇メートルである。一九七一（昭和四六）年、調査のため松を切り、草をはらったところ、直径約一〇メートルの円形の浅い凹地が見つかった。調査の結果、この凹地は円形に掘りくぼめた住居跡であることがわかった。今から約一九〇〇年も前に廃絶し、埋没してしまった住居跡（二八号）がそのまま凹地として残っていたのであった。畿内の集落遺構が、それと知られる状態でわかる例が少ないだけに、この遺存状況にある驚異を感じた。

芝谷遺跡にある堅穴住居の平面形をみると、円形・隅丸方形・方形の三種ある。およそこの順に変遷すると推定されるが、いずれも床面中央に一個の大きな柱穴（心柱）があり、その周りに四〜五個の柱穴がある。また堅穴の周壁直下には浅い溝がめぐり、小さい穴がいくつも認められる。こうした平面形は芝谷遺跡のほか、他の中期の住居でもみられる。焼けたため、床面の土器がよく遺存した一二号住居跡では、炭化した壁の板材や柱材などが認められた。その焼材から推して壁の高さは一・二メートル以上あったことが知られ

1 考古学からみた原始・古代の高槻

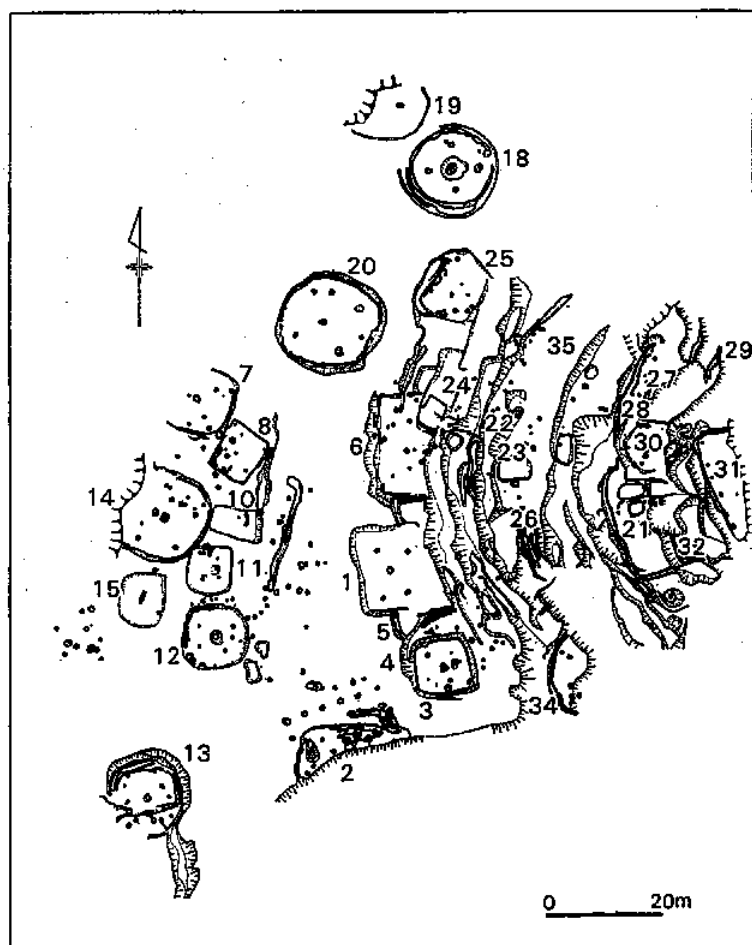


図101 芝谷遺跡の住居群

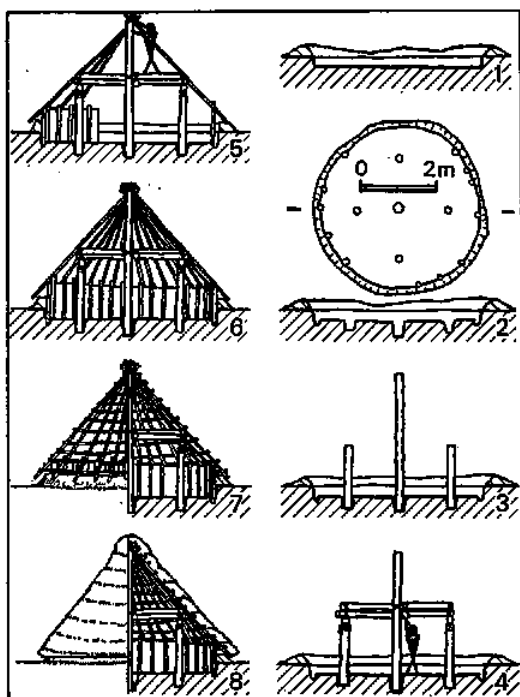


図102 堅穴住居のつくり方 (芝谷遺跡)

る。住居の建て方を順を追って復原してみると図一〇二のように推定できる。その住居の西南部の壁に接して竈がつくりつけてあり、傍に砥石が二個あった。砥石は屋外にあった一例を除けば、他の一三例はいずれも屋内の一隅にあったから、本来、砥石は各住居に備えられていたのだろう。しかも、鉄斧があるところを見ると、これらの砥石は鉄製の刃物のためのものであろう。

この丘上のムラは、最初、尾根の平たいところに円形の住居が数棟たち、その後、隅丸方形の住居が平地の縁辺にならび、平地の中央には幅二〇メートル程度の広場が残された。最後に方形の住居群が、東側の縁辺から斜面に集中したらしい。斜面に住居をつくるには、住居をつくれる広さだけ斜面を削りこんだ。そのため、住居の床面は地山上にあるけれども、住居の背後には高い崖ができることになった。その結果、建替のたびに斜面の上方から下方へ、しだいに下降していったことがわかる。はじめ丘上の平地にあった住居が、のち東側斜面に移っていったのは、

冬季の西北方からの冷たい風を避けたことと、東側の谷間の湧水や水田との往来も考慮したからであろう。

縁辺につくられた方形住居には、竪穴の壁の高さが一・五メートルもあるものがあるから、さきに焼材で推定した壁の高さとも符合する。竪穴住居がこのような高さの壁で囲まれていたとすると、その内部は、壁際でも人が立てるほどであったことになる。ただ、出入口については、構造が明らかでない。

この丘は北側から西側にかけて、急峻な崖になっており、西側の崖下には投棄した土器片が散乱していたから、この崖を通路として使うことはなかったろう。東側や南側は、現在道路で切断されているが、道路をへだてた向い側にも同じ続きの尾根があり、土器片の散布が認められるから、本来、尾根つづきに住居がひろがっていたと考えられる。この遺跡のように、斜面を階段状に削って住居を建てた例として、岡山県用木山遺跡がある。

用木山遺跡は中期中葉にはじまり、中期後半に爆発的に拡大し、中期末までつづいている。その間に約一〇〇基の竪穴住居と一基の高床住居とが認められた。調査した神原英朗氏は、重複したり、近接したものと併存し得ないもののあることを考慮し、約六〇基前後の集落を推定している。尾根の稜線上に数基がならぶ例、斜面の等高線にそって削りこんだテラスにならぶ例などがあって、全部で一四のグループが検出されている。氏はこの遺跡について、「階段状に造成されたテラスに営まれた住居群は、そのスペースからみて、四〜六戸の単位グループを構成しているが、共通点をもっている。比較的小形の一辺四・二メートル、四・七メートルの隅丸方形、または径五メートル前後の円形住居群と、一戸の大形住居の組み合わせとなっている。そしてまた倉庫を想起させる高床住居は、こうしたグループ内には存在せず、やや小高いテラスに

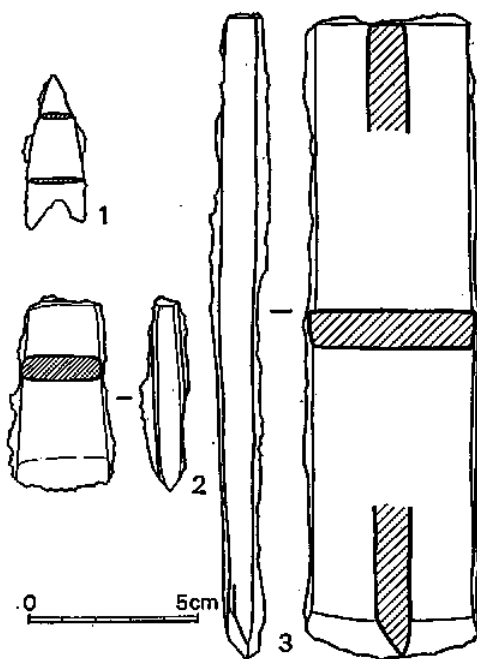


図103 鉄鎌(1)・鉄斧(2・3)〔1・
2古曾部遺跡, 3芝谷遺跡〕

をはかつて、耕地は谷口から埋積平地縁辺に拡大され、労働力としての人口も増大し、集落も膨張する。住居適地の少ない丘陵地内において住居空間の拡大は、階段状の宅地造成へと発展する。そして、肥沃な埋積平地での生産活動が安定した中期終末の時期になって、本集落は発展的に終結し、より便利な丘陵裾部へと集落をあげて移行した」と推論した〔神原英明「岡山県用木山遺跡」『日本考古学年報』二五〕。

芝谷遺跡の集落も用木山遺跡と同様な動きをとったのであろう。名神高速道路ができるまでは、遺跡の南側は天神山遺跡や古曾部遺跡へ尾根づたいに行けた。古曾部遺跡も芝谷遺跡と同じ頃の遺跡である。鉄斧や

一棟分のみ存在する」と述べたあと、このような単位グループを「共同体の最小の単位集団を示すもの」との可能性を考え、こうした単位集団が幾つか集まって、さらに大きいムラを形づくるとした。そして、この集落遺跡の消長について、「弥生時代中期中葉に、新しい耕地を求めて、谷水田を開拓した人々は、緩傾斜の丘陵斜面に適地を見出して、小規模な集落を営み始める。それが、中期後半になると生産の増大

鉄鍬はあるが、石器は表面採集した石鍬一個のほか見当らなかった。この尾根をさらに東へゆくと、紅茸山遺跡にたどりつく。このように、天神山から日吉台・古曽部一帯にひろがる標高約一〇〇メートルの丘陵上には、弥生時代中期の集落が点在している。これらのうちで最も早く成立したのは、丘陵の南側にある天神山遺跡である。その遺跡の成立が中期初めからはじまったことについては、すでに述べた。中期から後期にかけて、天神山のムラが繁栄した間に、中期末から後期初めに古曽部遺跡や芝谷遺跡のムラができ、後期には丘陵東端の紅茸山にもムラがうまれたのであった。中期から後期にかけて、丘の上にムラがつくられるのは、この一帯だけではない。対岸の枚方市や六甲山の麓など大阪湾沿岸、はては瀬戸内海沿岸の各地にみられる。これらを「高地性集落」と呼んでいる。高地性集落の出現する時期が、石製の鍬や槍が大型化することと併行するところから、中期以後の戦國の激化を想定し、軍事的な性格をもつ遺跡として解釈する見解がみられる。

萩ノ庄遺跡

安満遺跡の東北、萩ノ庄の丘の上に中期末から後期初めにかけてつくられた堅穴住居がある。標高一〇〇メートル余の遺跡に立つと、安満のムラは直下に見え、そこで働く人の動きは、手にとるようにわかる。また、南へのびた尾根の前方には、淀川の流れが光っていて、往時この水流を舟行する影を迅速く看取できたに違いない。晴れた日には、左手に枚方のムラ、前方に生駒山、右手に六甲の山塊や三島野をのぞむことができる。このすぐれた眺望が、何よりもこの遺跡の性格を規定する要因であろう。しかも、住居のすぐ裏には、夏でも枯れることのない溪流がある。中期末の住居は堅い地山を削って柱を建て、溝を掘ってあった。柱穴の底には、掘るとき使った石庖丁の小さい破片が残っていた。しかし、

溝には幅六センチ前後の刃先の痕跡がいくつも認められた。おそらく、鉄製の掘り具を使ったのだろう。こうした遺跡については、直下の安満のムラと密接な関係をもった見張所のような機能を推定してよいだろう。それは瀬戸内の芸予・備讃の海峡部にのぞむ諸遺跡や六甲山麓の高地にある遺跡にも似た性格のものであり、中期に活発化し、拡大する交易にもなつてうまれたものであった。淀川水系におけるこの種の施設の成立が、瀬戸内よりも遅く、規模も小さいのは、交易の規模・頻度・性格等が異なっていたからである。

丘の上 一方、安満のムラの後背丘陵には、先述のように、天神山以下のいくつものムラがあった。のムラ これらは萩ノ庄のそれとは異なる性格のムラである。尾根や谷へ傾く斜面に住居をつくつた

のにはそれなりの理由があった。中期のはじめに、天神山のムラが成立したときの契機が、平地の耕地の流失や損耗にあつたように、母村の中から、しばしば分離・放出される小集団があつたであろう。たしかに、中期末にも再び前回を上回る規模の大洪水のあつたことが知られている。芝谷や古曽部のムラの出現は、この洪水と無関係ではあるまい。しかし、この段階は、すでに鉄器が普及しはじめていた段階であつた。丘の上のムラは谷水田の開削や斜面の畑地化をおこなうだけでなく、新たな平地の耕地化——おそらく半乾田——にとりかかったのであろう。彼等が天神山のムラのように、その後も長期にわたつて定住せず、まもなく下山したことや、津之江北遺跡のように、後期に新たな平地のムラが成立することをみると、丘の上のムラと平地のムラの消失と出現は一連の動きであつたといえよう。斜面を削つて平地をつくること、谷間に棚田をつくり、水を溜め、それをひくこと、それらの技術は平地の水田にも活かされたであろう。それは、か

つて都出比呂志氏が指摘した〔郡山比呂志「農具鉄器化の二つの時期」、考古学研究「三十三」〕、中期末にはじまる農具鉄器化の二期にみあう新しい段階であった。『後漢書』が記す韓土の「国出鉄、濊倭馬韓、並從市之、凡諸貿易皆以鉄為貨」という記事や「安帝永初元（二〇七年）、倭国王帥升等、獻生口百六十人、願請見」という記事も、おそらく鉄をめぐる、急速に展開しはじめた交易や国際関係を示しているであろう。そして捲き起こった二世紀中頃の「倭国大乱」の状況も、まさに鉄器による生産が、急速に拡大しはじめたときの、最初の争乱であったのであろう。

中期の農業について、農耕具は「前期のそれとは、細部において異なる点はあるけれども、形態や種類等ほとんど異なるものはないようである。水田耕作のあり方が、中期には耕地の拡大——集落の拡大はあったとしても、前期とほとんど変りのないものであった」という見解がある〔瓜生繁雄「調査報告Ⅱ」、瓜生〕。中期末からはじまる新しい段階に比べれば、もっと鮮明になろう。中期に不足がちであった鉄は、中期中頃から終りにかけて、鉄鍬にかわる石鍬を、鉄剣にかわる石剣を生んだ。石鍬の形も前期には凹基無茎式や平基無茎式で、比較的小型で軽いものだったのに、中期初めには凸基無茎式がつくれ、前二者と共存し、中頃には凸基有茎式が加わる。しかも凸基式がいずれも、長さ三センチメートル以上、重さ二グラム以上のものが多いこと、そして鉄鍬・銅鍬に比肩し得るものがあることは注目に値する。石鍬のこのような変化や石槍の大型化、さらにそれらの多量化の現象などをふまえて、石製武器による闘争の時代を推定する見解がある。しかし、集落の立地さえ変更せしめるほどの闘争を惹起するような矛盾が現出していたとは考えられない。むしろ、中期初めから石鍬が変化しはじめる現象の基底には、人口の増大に対応して、なお生産性の低い農業部門のみ

に依拠しきれない側面として、狩猟用具や技術の改良が試みられつつあったのであろう。遺跡によって、石器の組成に多様なあり方がみられるのも狩猟に対する集団の対応の違いを示すのであろう。

水田の土壌・経営など、農業をとりまく環境の差異は、ムラむら相互の間に、漸く格差を生みはじめていたに違いない。豊かなムラは余剰稲を得たろう。でも貧しいムラは、依然として農業以外の部門（狩猟・漁撈等）への依存度を低めるわけにかなかったであろう。こうしたムラむらの間に、徐々に差を生みはじめていたのが中期の段階であったと考えるなら、この格差を決定的にしたのが、中期末の鉄器の普及と自然の脅威であったといえよう。

後期の前半における混乱は中期に鬱積した矛盾の爆発であり、その結果、ムラむらの間での地域的結びつきを強め、統合する動きが生じた。その地域的結合の象徴として、新たな装いをもって登場したのが、突線鈕式銅鐸であった。形は鐸であっても、それが担う意味は変質し、形式化していた。かつてはムラの祭り、そこに娯楽する人々の血縁的な結合の響きとして聞かれたのであった。しかし、いまや結合の地域的拡大にもなつて、非血縁的な集団をも含みはじめたとき、銅鐸は一種の擬制的血縁の象徴となったのである。天神山の銅鐸が祭器として登場するようになったのは、まさにそういう段階であったと推定される。おそらく銅鐸の集積も新たな地域的統合のなかに起つたのであろう。

紅茸山遺跡

市立第八中学校のあるところは、以前は標高五〇メートルまでの小高い丘であった。この丘は、羅王山の方から東へのびた支丘の一つであり、公園墓地のある安満山と向いあつてゐる。この間を松尾川が流れる。安満から成合を経て、北へ通ずる径は、紅茸山の下を通る。これから述べる

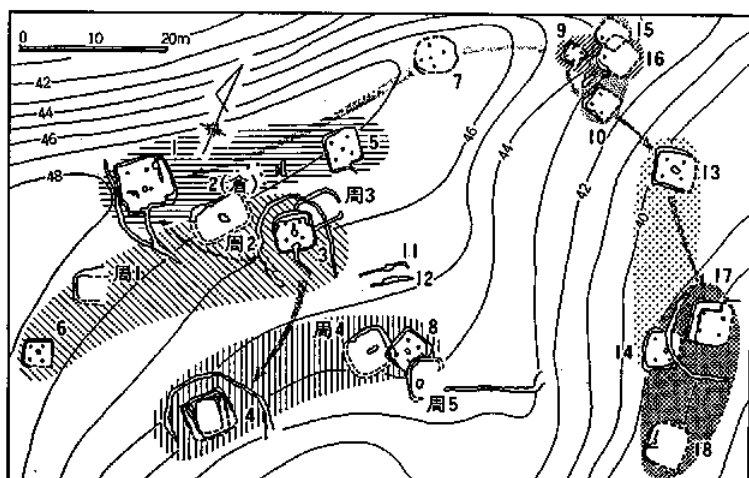


図104 ムラのうつりかわり (紅葦山遺跡)

紅葦山遺跡は、そうしたところに位置した後期のムラのあとである。学校をつくるために、丘を削りとったので、遺跡のあったところは、今は空中の一角になってしまったが、およそ校舎の屋上ぐらいのところになるうか。学校の正門へあがって行く道筋は、深く西北へはいりこんだ狭い谷であった。この谷の北側に、東南方向へのびた尾根があり、その先端が安満の墓地である。紅葦山のムラは、この谷奥をあがったあたりから、尾根上にひろがっていた(A区)。また、この尾根の北側にも細長い谷が西北へのびていたが、その谷の側にも住居があった(B区)。現在、この谷を埋めて名神高速道路がはしっている。

弥生後期の住居跡一八基を検出したが、隅丸方形の平面形のもの一基のほかはすべて方形の竪穴住居である。住居を建てた時間的前後関係を整理すると、およそ図一〇四のようなになる。最初、東南へのびる尾根の最も奥のところに、隅丸方形の住居(七号)がつくられ、そのあと

南のA区では一号・五号、三号・六号、四号・八号といったように、同一等高線上にある大・小二基つづが組合って、高い方から低い方へ移っていったようである（一一号・二号は細い溝や穴のみで、住居の形態はわからない）。一方、七号住居から東北へ張出した尾根にも小さい方形の住居四基があり、うち二基が重複しているところから、二基つづの二組の重なりを推定できる。これらの東にひろがる緩傾斜面にも四基二組の住居がある。これらもA区と同じように、同一等高線上に大・小二基つづがならんだように建てられたらしい、大・小二基が一組になっている意味はわからないけれども、A区とB区に二流れの住居群があつて、三ないし四回の移動が推定できる。この丘の上のムラが二つのグループから成り立ち、それぞれ居住区を異にしていたことがわかる。その存続の時期は後期の中頃に相当する。

A区には、一号住居と五号住居の間に、高床の倉が一基ある。B区には倉が認められないから、断定はできないけれど、この倉は二つのグループに関与しているのかもしれない。また、A区には五基の方形周溝墓と二基一組の土墳墓があり、そのうち三基の方形周溝墓は堅穴住居と重複している。そのほとんどは時期が明らかでないが、住居廃滅後につくられた可能性がある。B区では一〇号住居の裏に一基の土墳墓があつた。住居に近接して土墳墓を営む例は、他の遺跡でも認められる。

紅雲山三 号住居跡

A区の地形は西北が高く、東南が低い。この緩傾斜地に堅穴住居をつくると、そのままでは雨水が屋内に流入する。そのため、住居より高い方に、浅い溝をめぐるしてある例がいくつかある。その典型的な例である三号住居について、その様子をみてみよう。傾斜面の等高線に沿うように、一辺約五メートルの方形の堅穴を掘り、谷にむかった東南辺を出入口とし、それと反対の西北辺と東北・西

南辺の一部にかけて、コ字形のベッド状のつくり出しを設ける。その幅は約一メートルある。堅穴の床面は旧地表から五〇〜六〇センチメートル程度のものであつたらう。床面には柱間約二メートルで四本の柱をたてる。柱と周壁との間には約一・五メートル幅の空間がある。四本の柱がつくる方格のほぼ中央に炉をつくり、奥へむかつて細い溝をきつてある。おそらく火種となるような丸太を焚べるためのものだらうか。周壁に沿って幅約二〇センチメートル、深さ約五〇センチメートルの比較的深い溝を掘つてある。この溝には壁板を落し込む。壁の高さがいくらかあつたかは推測の域を出ないが、壁際まで人が立てただらうから、約二メートルはあつたらう。堅穴の周壁から約一・五メートルの間をあけて枕跡があり、その外側に溝がめぐり、あたかも住居を覆う屋根の形を地上に映したようになってゐる。これが軒先だとすると、一種の雨落溝である。この溝から壁の高さ約二メートルを結んで延長すると、約四五度の傾斜をもつ屋根になり、屋根を支える四本の柱は長さ約四メートルの材を要することになる。四本の柱はその上端に横木を渡して結び、壁板もその上端に横木を渡して、四本の柱と結びつけたとするなら、この横木の上には屋根で限られた三角形の空間(E・F)が生ずる。その高さが一五〇センチメートルもあるから、ここを利用した可能性も考えられよう。屋根を葺いた草が何かは判らない。カヤでも葺いたらうか。厚さ五〇センチメートル近く葺けば、屋根頂部の高さは地表から四・五メートルほどになる。炉からあがる煙を出すための煙り出しの構造はないかもしれない。板壁の隙間風を防ぐため、外側から板や草を詰めたり土を寄せて固めたであらう。この住居の入口をどのようにつくつてあつたかは判らないが、内部に落込みがあり、そこから外部へ排水溝がのびてゐるところを見ると、入口には板を渡したり、板戸をとりつけてあつたらう。内にはいると、板囲いの中にいる

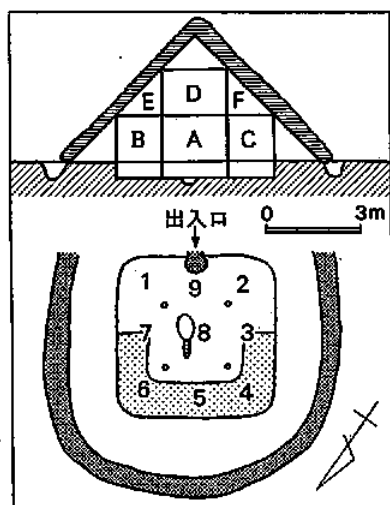


図105 住居の空間（紅茸山3号住居）

同じ状況を他の住居でも認めたから、当時の住居には逆有な使い方なのだろう。土器のあるところから、この空間（4）は器物を納置し、それを扱う主婦の空間かもしれない。奥の正面（5）を主座とし、入口の間（9）を通路として除外するなら、炉を囲める人数はあと三〜四人であろう。入口の左の空間（2）は一号住居では浅い溝で仕切られ、他の空間と区別されているから納戸のようなものかもしれない。この程度の住居なら、材料さえととのえば男手二〜三人もあれば、数日で建てられただろう。

いま例にとった三号住居（面積約二五平方メートル）に五〜六人が住んだと仮定すると、同時に存在した六号住居（約二二平方メートル）には二〜三人程度が住めよう。するとA区では、一時期に一〇人未満の住人がおり、B区もそのくらいの人数とすると、この紅茸山のムラの人口は、せいぜい二〇人くらいであろう。男

感じだろう。炉でくべる木のおい煙の煤で黒くなった暗い内部には、射しこむ光は入口からしかはいつてこない、窓のない住居であった。土間には草や板切れを敷いてあったろう。奥につくりつけられたベッド状の構造が、どんなための構造なのか判らないが、入口と反対の奥まったところに設けられているところをみると、住居の中で大切な部分なのだろう。また入った左奥に、完形の壺・鉢・高杯・器台などが置いてあり、小型の土器がいくつも並べた状態で見つかった。

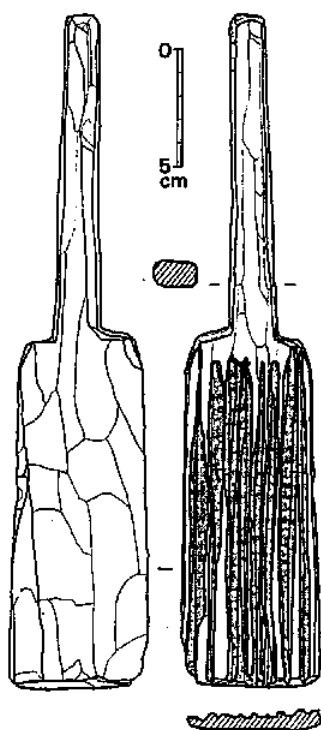


図106 叩板（茨木市東奈良遺跡）
〔東奈良遺跡調査会提供〕

女半数とし、稼働労働力としてあてになるのは、五、六人であろう。はたして、あの倉にどれだけの剰余生産物を納め得たろうか。倉の管理に三号住居の主があたったとしても、彼が代表する集団の規模は二〇人程度のものであった。このムラの継続期間を約八〇年間とみるなら、倭国大乱期頃にこのムラがつくられ、卑弥呼の第一回朝貢期までには、このムラは廃絶していたことになる。そのころ、各地の丘上のムラが消えるのと軌を一にしている。その背景には、新たに始まった政治的な力によって、平地へ引き戻す動きがあったのであろう。この丘の上に再び人の手が加えられるのは、首長の棺（ツグナ）のぼってくる五世紀であった。

叩技法と鉄

紅葺山遺跡から見つかった土器の表面には、粗い叩目がついている。それは土器をつくるとき、外面から叩いた道具の痕跡である。最近、茨木市東奈良遺跡から、全長三〇センチメートル足らずの羽子板状の叩具がみつかった。それは長さ一六・五センチメートル、幅五・七センチメートル

の叩き面に八条の細い溝を木目に平行に彫りこみ、それに柄を削り出してある。細い溝をきつてあるのは、叩板に粘土がつくのを防ぐためである。だから縄を板に巻いてもよい。中国では古い段階から、縄を巻いた叩具をつかって叩き締めている。それで印された文

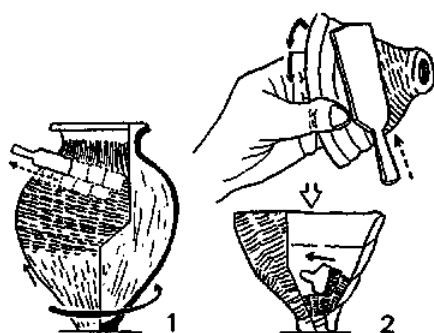


図107 叩技法の違い（都出氏論文『考古学研究』20—4による）。

様を縄席文と呼ぶ。とくに中国陶器の本流となった還元焰焼成の灰陶では、この縄席文を縦にならべるようにつけ、装飾的效果さえ意図している。その場合、叩く作業は製作最終段階に近いところでおこなわれる。ところで、叩板は土器を叩き締めるために使用される。その際、土器の内面には堅い当て型をつかうか、手でうける方法がとられた。その段階はなお粘土が軟いから、叩くことによって、接合部の粗い部分が緊密になろうし、器壁もいくぶんならされて、ひろがるだろう。そのため、土器の体部のふくらみや厚さをそろえることもできよう。また壺のように、表面を丁寧に磨きあげるものでは叩目は残らないが、甕のように磨かないものでは、叩目がそのまま残ることになる。何よりもこの技法の利点は、土器製作をスピーディーにやれることだったと推定する。しかも叩技法に熟達すれば、粘土の伸張する特性を活かして、器壁をより一層薄くすることが可能になる。こうして叩技法は後期末までに格段の進歩を遂げ、しかも、内面の凹凸を削りとる技法も加わって、土器底部の丸底化を成し遂げた。この両技法にさらに表面調整の刷毛目をかけると土器へ移ることになる。そういった意味で、叩技法は弥生土器が、次代の土器へ残したすぐれた遺産であった（叩技法が弥生土器のは、畿内第四様式の段階である。しかし、そこではなお一般化していない。これが一般化するののは後期である）。

叩技法を検討した都出比呂志氏は、「第四様式の叩技法と第五様式のそれとは原理的に異なる」ことを指摘した（都出比呂志「古墳出現前後の集国関

保「考古学」四。前者ではほとんどが叩目の方向が右下りか水平であり、後者では、中・南河内で圧倒的に右上りが多い。だが播磨以西九州にいたる西日本の瀬戸内沿岸地域では、水平あるいは右下りの比率が高いという。この相違の起因するところが、製作技法上の相違に基くことを指摘したのであった。いま、氏の考証に導かれながら、後期の土器づくりをみてみよう。

第四様式の土器の叩目文は、「土器を成形し、内外面をハケメで調整して製作がほぼ完了に近づいた時点で施されている」という。それは土器の全体をつくりあげた後に叩く結果、右下りになるのだといえる。さて、後期の叩板の使用法はどうなのか。かつて坪井清足氏は「輪積み」による成形を指摘した。それは、叩目の方向が部分的に異なるところから、底部・胴部・肩部以上の三個の部分と接合して一個の土器をつくりあげたと解するもので、それを都出氏は「分割成形技法」と呼び、後期初めの土器（西ノ辻Ⅰ式）にも、この技法を認めている。甕の場合、粘土紐を巻いて径二・三センチの輪台をつくり、その上に粘土紐を巻きあげて、逆円錐台をつくる。広い口から左手をいれて支えながら、右手の叩板で外面を叩いて粘土紐の接目を消し、その後、輪台の孔に粘土をつめてふさぎ、内面を平滑にする。都出氏は「以上の逆円錐台の底部をつくる過程を成形第一段階」と称した。そして、成形第一段階の逆円錐台が半乾燥した時点で、円筒・逆台形の輪を重ね、接合面を重ねて叩き、それが半乾燥したらまた円筒を重ねて叩き、土器をつくりあげると説明している。こうして分割成形する結果、分割の回数だけ、叩目の方向が異なり、成形第一段階の部分では右上りが多く、その後の成形工程では水平ないし右上りが多い。この角度は、土器の断面カーブと叩板との位置関係で決まると解し、叩目の角度の変化をとらえて、「連続ラセンタキ手法」によるものと類別した。

連続ラセンタキ手法とは、分割成形ではあるが、叩目の方向を変えることなく、接合した後に施す叩目のできるだけ連続させ、美しいラセン形を描いて胴上半部にむかつて上昇させる手法である。都出氏はこの手法が中・南河内で発達し、そこには叩技法ですべての部分で成形しようとする努力がみられること、器壁を薄く、しかもふくらみをもつ胴部をつくれるようになっていくと解し、土器の製作技術の上から後期の土器を五つの段階に区分した。この区分案は大局的には正しいであろう。

土器の製作工程で叩目文をつける段階が、第四様式では「製作がほぼ完了に近づいた時点で施されている」のに、第五様式の土器では、土器を数回に分割してつくる結果、各部分をつくる段階に既に叩く作業がおこなわれると解するなら、叩目のつけ方に関する限り、第四様式の手法は中国の灰陶やわが国の須恵器の手法に似ているわけで、第五様式の手法は、分割成形とからみあって発生した独自の手法ともいえる。しかも、この手法が中・南河内を中心に発展するところを見ると、その発生もこの地域であった可能性が高い。

叩技法が中期の終りに登場する背景には、灰陶系土器や鉄器の共存という事実が示すように、新たな鉄器文化の流れがあったのであろう。おそらく、紀元二世紀初めの朝貢記事もそうした流れの一つであろう。しかし、その後の叩技法の展開をみると、流入時のままの手法を踏襲した地域と、独自の技法にまで到達した地域とがみられる。独自の形成が紀元一世紀中頃に始まったとすれば、倭国大乱の激動期に相当し、その後叩技法に内面へラ削りの技法が加わって、丸底化への一步を踏み出したのは紀元三世紀の後半であった。

安満遺跡で、一九六七(昭和四二)年二月に調査した際検出した小溝は、中期につくられた方形周溝墓の上を横切っていた。その溝の傍には、一棟の掘立柱の住居が建ち、その付近の溝内には多数の土器が投棄され、

Ⅱ 考古学からみた原始・古代の高槻

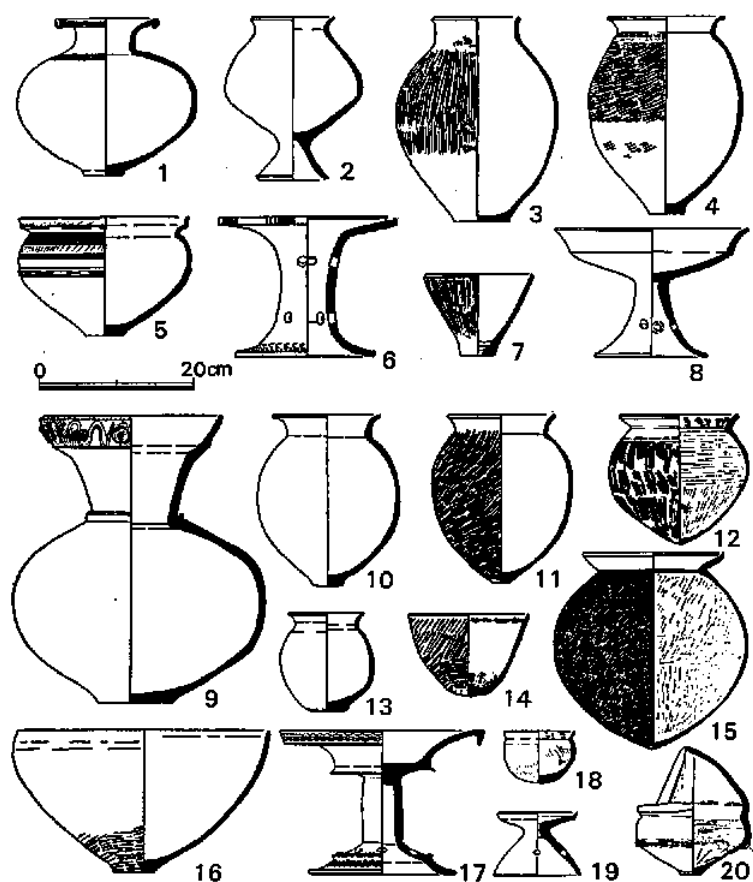


図108 後期の土器（1～8・10～18安満遺跡，9・19・20郡家川西遺跡）

そのため溝のつけ替えがおこなわれていた。溝内の夥しい土器群中には、一見して、中・南河内の土器と判別できる多数の甕が、在地産の土器と混在していた。こうした事例は、その後、茨木市太田の遺跡でも検出された。畿内のみならず、遠く瀬戸内西端の大分県安国寺遺跡にもこの種の土器が運ばれている。こうした広範な土器の動きは、土器そのものが交換の対象となったこと、そして、畿内・瀬戸内を中心に、活発な交流のあったことを物語っているであろう。

邪馬台国 これまでみてきた弥生時代は、前期・中期・後期の各時期に、それぞれ特色ある段階をつくへ。道りあげた。なかでも中期の終りから始まった急激な変革は、後期の社会を真正な鉄文化の社会として特色づけた。この時期の前半に動乱——魏志にいう倭国大乱——の時期を指定するなら、後半には邪馬台国が登場する。しかし、これまで、その女王国の所在は謎のままである。その基因はいろいろあるけれども、三世紀が考古学研究の上で、不明確なままであったことも、基因の一つであった。だが、いまや弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年が可能になると、三世紀の問題も具体的に追求できるようになった。といって、謎の女王国を見つけたわけではない。ただ、そこへいたる道を考えてみようというわけである。

一般に「魏志倭人伝」の称をもって呼ばれる文献資料——三国志魏書東夷伝倭人條——は、これまで多くの人々によって検討されてきた。しかしなお、その主たる部分について完全な理解の一致をみていない。たとえば女王の都する邪馬台国について、甲は畿内説を説き、乙は九州説を説くが如くである。こうした学説の対立は、ひいてはわが国古代史の再構成をめぐる、大きく分岐するところともなっている。

魏志が晋の陳寿（?—一九七年）によって撰せられ、少なくとも三世紀代に東夷倭のことを述録しているということは、注目すべきことである。わが国最古の史書である古事記・日本書紀が大化前代の帝紀・旧辭を採録するところあるとしても、なおその編纂の時期が八世紀前半であつて、これによって遠く三世紀まで遡ることはなほ多くの困難を伴う。しかし、これに対して同時代史料としての魏志のもつ有利さは、それが中国人の手になるものであるにせよ、なお高いものであることは言をまたない。

魏志 倭人 中国二七史中、わが国の伝をのせるもの一七史、その中「夷伝」として録するものは一一史伝の構成である。古くは三国志から後漢書を経て新唐書に及ぶ。これらの「東夷・夷蛮」史の中で、わが国は一貫して「倭」の名をもつて呼ばれてきた。倭は半島夷蛮国について記載されるのが一般であつた。いま魏志について、それぞれの東夷に関する記載法をみると次の通りである。即ち、はじめに（一）位置、（二）隣接地を掲げ、最後に紀年を掲げてその歴史を記し、面積・地味・人性・組織・産物等を記載する方法である。それは前半に地誌を、後半にその歴史を記すという順位であるといった方が判りやすい。

しかしながら、こうした記載方式の中にあつて、倭人の條はやや特異である。即ち、（一）前段の諸国が概して一括され簡単に説明されているのに対し、倭は女王の都する邪馬台国までの道程を追うことに意を注ぎ、極めて長文であること。（二）諸国の名を列記することは韓伝馬韓條、弁辰条と同様であるが、その掲げ方は「次……国」の記載法をとっている。（三）諸国名を列記した後に「自郡至女王国萬二千餘里」の距離記事は前段と分離しているなどの諸点をあげることができる。

倭人の條の比較的長文であることは、倭に対する関心が甚大であつたことを物語るものであろうが、女王

の都に至るまでの道程諸国の記載が、倭人條の長文化を招く一因となっていることも事実である。

なぜこのような邪馬台国への一定コースを明示記載しなければならなかったのか、その理由は明示されていない。だが、恐らく「親魏倭王」に叙したということが、ひととき大きな意味をもっていたに違いない。だからこそ、道程諸国について「皆統属女王国」と記し、またその他の傍国にしても「此女王境界所盡」という関心が払われたのであろう。

経過地・郡より邪馬台国までのコースについては、これまた種々の解釈があつて一定でない。邪馬台国を畿内にとるか、九州と解するかは一にこのコースの理解如何にかかわっている。

そこでこのコースをどう解するかというについて考えてみたい。郡より邪馬台国へ至るコースは、やはり対馬国以下七ヶ国を一本で通過したと解するのが隔当な解釈のようである。なぜなら、先述の様に東夷伝中、長文の道程記事を掲げている特異なスタイルは、この倭人伝のみである。それが長文化せざるを得なかったのは、「親魏倭王」の都する邪馬台国までを、まず明示しなければならない甚大な関心が存したからであろう。「其の戸数・道里は略載す可きも、其餘の旁国は遠絶にして得て詳かにす可からず」とはつきりことわったのもその関心の相違に帰着するとみたら誤りであろうか。恐らくコース以外に存したなら、次の二ヶ国の如くその名のみを記すに止めるか、あるいは名さえ記されることがなかったであろう。

ところで問題の方位と里数であるが、速きを涉り、道路動勞する夷蛮のことを外国人が記述したのであるから、いきおい大まかにならざるを得なかったであらうし、誤りもあつたであらう。事実、その方位は「東」であり、「南」であり、たかだかその中間とみて「東南」である。また距離や面積、人口にしても「餘里」

とか「餘戸」とか表現せざるを得なかった。「百里」と言い切っても、それはざっと百里のことであった。となれば、この方位里数も概略のものと考えねばならない。

そもそも倭へ渡る狗邪韓国が朝鮮南岸の地点であることは、国名にわざわざ「韓」の名を付していることから察しがつく。海岸沿いに舟行する程度の航海技術で一海を渡るのであれば、海を距てて遠く島影を認め得るほどの近距離が最も利用されたであろう。この国を洛東江河口付近に求めることは最も可能性がある。事実、考古学上の知見からしても矛盾はない。

ここで始めて一海を渡って対馬に至る。しかしそこは絶島であって、つぎの一支国に比べ貧弱である。実際壹岐原ノ辻遺跡やカラカミ遺跡にみられる規模の遺跡は、対馬にはない。また古墳時代も同様である。遺跡の分布からいって、対馬へ上陸するのはおそらく、上島と下島の中間の入江付近であつたろう。

そしてまた南へ一海を渡って一支国に至る。そこは対馬よりもほぼ三倍の人口があり、田地もあるが自給するには不足する貧しい島であつた。上述の二つの遺跡の中、原ノ辻遺跡は奥まった入江と北へ伸びた低い台地とを有し、住むに恰好の地形である。

また一海千餘里を渡って、末盧国にいたる。これが古事記の筑紫の末羅県（仲哀記）、日本書紀の火前国の松浦県（神功紀）であり、延喜式の肥前国松浦郡すなわち現在松浦川の注ぐ唐津湾沿岸を指すことはほぼ正しい。この地域に細形銅剣や甕棺墓が存し、弥生時代前期―中期に外来文化を著しく吸収したことは考古学的にも積極的に主張し得る。

これにつぐ伊都国もまた、三雲・井原等の巨大な遺跡が存し、しかも記の筑紫国の伊斗村（仲哀記）、紀の

筑紫の伊観県（仲哀記・神功紀）、風土記の怡土郡（筑前国風土記逸文）であり、延喜式の筑前国怡土郡、即ち現在の糸島郡を指すこともまた動かないところである。

ところでこの方向は、明らかに「東」であって、魏志の「東南」と一致しない。このことは大まかな方向性と考えらるなら、既にここで四五度のずれを生じたのだとみることもできる。しかし「東南」という中間方位に真実性をもたして魏志を弁護するなら、そのまま理解できないわけではない。まず末盧国は珍らしく官がない。思うに上陸地であって、全くの経過地である。好んで魚鰓を捕える彼等の漁場はときに荒磯であって、末浦川の沖積地よりやや離れたところをも生活の環境として持っているらしい。そして壹岐から最短距離を渡るとすれば呼子半島であらうから、この上陸地点から松浦川一帯までを海の湾入に沿って陸行すれば、前半の路は東南方向であって、記するところである。事実海岸のゆるい湾曲線が人の方位感を鈍くするのは、よく経験されるところである。そして結果としては「東」であるにすぎない。記録は正に経験のままなのであらうから——郡使の往来する伊都国まではいったに違いない——あながち嘘ではなく真実を記したつもりかもしれない。

伊都国から奴国へは海岸沿いにほぼ東へまっすぐである。奴国は鑑河（神功紀）の流れる鑑原（仲哀記）であり那津（宣化紀）のあるところであった。延喜式の筑前国那珂郡である。須玖遺跡や春日遺跡のある沃野は、大きな遺跡を生むに足る平野であり、多数の集落を群集さすに十分である。まさに二万餘戸という伊都国の二倍に及ぶ人口を想定するには恰好の平野である。皮肉にも魏志の「末盧国」（東南）——伊都国——（東南）——奴国」の直進方向は、現実の「松浦——（東）——糸島——（東）——福岡」の直進方向となっておきかえねばならない。

れども、三国を直進することでは一致している。

ここまでは九州説・畿内説といえども、従来ほぼ一致した見解である。つぎの不弥国がいずれかは、大いに問題のあるところであるが、これらの諸国が、目的地邪馬台国へのコース上の国々である以上、郡より奴国に至るまでにたどったと同じように、海岸沃野に立地する集落を縫っていったと考えることが蓋然性があるように思う。

ここで東から南へ方向を転じて投馬国へ行くことになるが、行きつくところは目的地の邪馬台国である。そしてその方向はやはり「南」であって、さきの末盧——伊都——奴の直進方向の組合せに似ている。つまり、その意味では出発点と終点とがわかれば中間の土地は自らわかるという仕組みであって、不弥——投馬——邪馬台の一組として考える要がある。実際その組合せは水行二十日、水行十日陸行一日であって、これまでの諸国と記載の単位を異にしている。

ところで、この組合せを想定しうる条件はそう多くあるわけではない。(一) まず集落の規模に置換えれば(千餘家——五万余戸——七万余戸)の關係がみられる必要がある。(二) 官でみるなら、多模(卑奴母離)——彌彌(彌彌那利)——女王(伊支馬・彌馬升・彌馬支・奴佳)である。(三) 邪馬台国という終点が政治的中心とみられる地域であるから、考古学上もまた、そうした遺跡なり遺物なりの存在を示している要がある。(四) しかも前記の条件の他に地理的距離がほぼ二対一の關係にあることが望ましい。(五) 三世紀のこのような事実はその後の時代にも決してその關係を時間の中に没せず、何等かの形で止めているに違いない。まずこれぐらいの条件を考えていろいろあたってみるなら、従来九州説を掲げていることがいかに不都

合か一目瞭然である。

もし三世紀中頃が弥生時代であるにせよ、古墳時代であるにせよ、考古学的にみて九州には、まず右の諸条件を充す地域は見当らない。

そこで、九州にその候補地を求めたいとすれば、有力な候補は畿内である。北九州から畿内へくるとすれば、まず瀬戸内航路が最も可能性が高い。

前述の(四)の条件について参考になるのは、延喜主計式の記載である。海上運行に進歩があったとしても、諸国相互の所要日数比はさして時代をへだてても変らないであろう。次に京から諸国までの所要日数を延喜主計式によって記すと、播磨国・海路八日、備前国・海路九日、備中国・海路十二日、備後国・海路十五日、安芸国・海路十八日、長門国・海路廿三日、太宰府・海路卅日。

以上によってみるところでは、三〇日対九日の関係にあるのは備前国である。太宰府が奴国に近く、不弥国もその海岸沿ひ百里のところとすれば、さらにこの関係は三対一に近くなる。一方終点の方は、大阪湾沿岸から陸行一日なら、大和も山城もその範囲にはいるから、海路についても無理はない。

備前国で瀬戸内航路の中継地として注目されるのは児島半島一帯である。のちに吉備の五郡に白猪屯倉を置き(欽明紀・敏達紀)、朝鮮半島への重要な拠点となっていることをもってしても、有力な中間地域である(五)。この地域は弥生時代遺跡の濃密な分布をみることに、また銅鐸の発見例の多いこと、古墳時代になっても重要な古墳が存する。つまり、吉備地方は遺跡分布の規模からみても、「奴より大きく、邪馬台より小さい」という中間的な分布規模を有する(一)。この吉備地方と遺跡・遺物のうえで有機的な関連を有し、この地

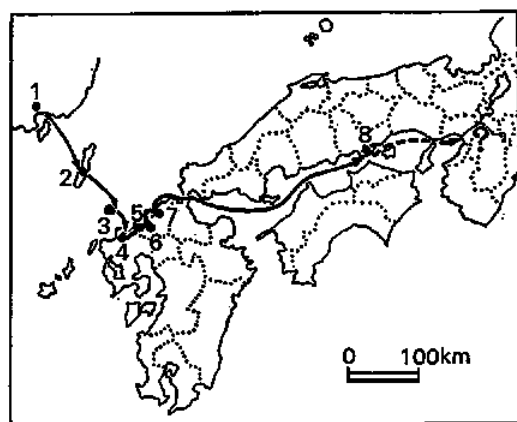


図109 邪馬台国への道 (1. 狗邪韓国, 2. 対馬国
3. 奄支国, 4. 末盧国, 5. 伊那国, 6. 奴国, 7.
不弥国, 8. 投馬国)

方を凌駕する地域は畿内であろう(二三)。官の性格が明瞭でないけれども、九州に比定される諸国のように、「卑奴母離(『夷守』)のごとき官を投馬国や邪馬台国に配置していないことをみると、両国は外辺的性格をもたない点が共通している(二)。

そこで地名について調べてみると、現在の玉野市に「玉」の地名がある。そしてその内陸には「奥玉」、さらに内に入って「玉原」の地名がある。このように「玉」の存するのは「投馬」TOMA=TAMA「玉」

なのではなからうか。従来、投馬を鞍にあてる説があった。しかし鞍は備後国であって、距離的には京と太宰府のちょうど中央に位置して一対一の関係である。さらに、考古学上注目すべき遺跡が濃密でないことから、児島半島の先端に位置する「玉」ほどにはさきの条件に該当しない。

ただ、児島半島即投馬国というわけではない。児島半島を中心とした地域に、玉の地名をもつところが多数あるから、玉を仮泊地とか寄港地と解し、吉備地方を投馬国の後身と解するわけである。投馬が吉備にあたるのは、なお、つぎの如き考証と推測による。

支とは魏書には朝鮮のことを記した韓伝とわが国のことを記した倭伝とがある。ところが、魏書韓
 なにか伝の馬韓条に、五十余国の国名を掲げた後、左の一文がみえる。

辰王治月支国臣智威加優呼臣雲遣支報安邪離支漬臣離兒不例拘邪秦支廉之號

従来この一文については、読解困難とされてきたものであった。まずこの長大なる名号を一見して注意に
 のぼることは、同号中に「臣雲」「安邪」「拘邪」等の国名と考えられるものが含まれていることである。
 さらにこの国名と思われるものと一字おいて、「支」なる文字が配列されていることを注意したい（右の文中
 臣離兒不例の「不」は支の誤写と考える）。すなわち臣雲遣支報・安邪離支漬・臣離兒支例・拘邪秦支廉である。

さて、これらと相似たものは、後漢書東夷伝の句驪の条に、

（建武）二十三年冬、句驪置支落・大加戴升等万余口、詣樂浪内属。

とある中の「句驪置支落」である。この一例およびさきの四例について共通なことは、「国名・何支・某」と記することである。馬韓の条の四例の中、臣離については、同様の国名を見出し難いが、臣雲は馬韓の一国「臣雲新国」を、また安邪については「弁辰安邪国」を、拘邪については「弁辰狗邪国」を指すものである。そして弁辰狗邪国が、倭人の条にみえる倭の北岸狗邪韓国と同一であることはほぼ察せられるところである。

一方、まず、魏志の倭人条には「爾支」・「弥馬獲支」がある。

到伊都国、官曰爾支、副曰泄謨、柄渠、

南至邪馬台国、女王之所都、（略）官有伊支馬、次曰弥馬升、次曰弥馬獲支、次曰奴佳媛。

さらに翰苑所引高麗記には、

其国建官有九等、(略)次太大兄、比二品、一名莫何々羅支、(略)次大兄加、比正五品、一名綱支、(略)次小兄、比正七品、一名失支、(略)其武官大模達比衛將軍、一名莫何邏羅支、一名大幢主、以皂衣大兄以上為之。

と記され、「莫何々羅支」・「綱支」・「失支」の四例がある。これらの「羅」・「綱」・「綱」は、いずれも織物であるところから、それぞれの官位に応じて着用した衣服を示していると考えられる。そして、同記に「諸城置処間」とあるのは、新唐書に「餘城置処間近支、亦号道使、比刺史」と記されている。この「処間近支」の他に同書には、「莫離支」がみえる。

また梁書には新羅の官について、

其官名有子貢卑支、齊卑支、閭卑支、臺告支、寄貝卑支

と記している。これらの「卑支」もまた注意すべきであろう。

いまこれらを整理して気付くことは、古くは「某国・何支・某」と表わすことが原則であったらしい。しかもそれらは国名と併記されるところから、有力な渠帥の尊号であったと考えられる。

そして、このような称呼は、三世紀以後にも存続したけれども、それは中国化の急速に浸透した百濟・倭では早く失われ、他の高句麗・新羅にかえって遺存し、しかもその称呼は官位的序列を示すものに転化し、最後には最も代表的な「莫何々羅支」のごとき上位者の称呼のみが形式的に残存踏襲されたい。莫離支・麻立干の形はすでに「マル」大の意味において、後世新羅王名として遺存したし、また高句麗で莫離支として呼ばれたものであった。

某支と記すことが、韓土の風習であり、そして魏書東夷伝の編者の類型的把握そのままであったとしても、「何支」と表現せざるをえなかった三世紀の東夷の世界をどのように理解するかが課題であろう。爾支や弥馬獲支と記述された人物に、支の付加される意味を認めるなら、高句麗伝にみるごとく、朝鮮や日本の地方族長層が「何支」と呼ばれ、自から中国の冊封につらなる臣智や邑長の段階にあったという形態こそ重視すべきであろう。ヒミコが受領した銅鏡百面のみならず、そのとき受領した額や羅などの高級な布帛類が、高句麗の首長たちのように、ヒミコを通じて首長たちの特別な地位を表明するものとされたかもしれない。支とはそのような中国王朝につらなる首長たちを意味するのであらう。東アジアの三世紀とは、なおそうした「支」の世界であったとみるべきであらう。投馬国が後に吉備と称する縁由を問うなら、さきに掲げた翰苑所引高麗記の文は参考となる。「又其諸大城置傳薩、比都督、諸城置處間、比刺史、亦謂之道使、道使治所名之曰備」と。支は吉に通じ、備の意がまた道使のごときものとすれば、さきに投馬国の中継的性格に應ずることをもって、吉備となしうることは、考古学的諸般の示すとおりである。

考古学の諸資料の累積されるところをみるなら、吉備の特異性もさることながら、畿内の諸類型を享有する瀬戸内中部北沿の吉備こそ、きわめて投馬的秘要の地域とみるべきであらう。